
静止衛星軌道十六番地の奇跡

高城りこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

静止衛星軌道十六番地の奇跡

【Nコード】

N6111R

【作者名】

高城りこ

【あらすじ】

静止衛星軌道十五番地。そこには国際大学コロニー、通称『奇跡の船』があった。運営は高季彬^{たかすみのきら}を会長とする学生の代表、執行部に一任され、予定外の新型ブースター実験の尻拭いや、地上の研究所から特待生として招かれた、12歳の博士如月葵^{きゅわい}の案内役をこなしていた。しかし葵は案内を拒絶した挙句、倒れて入院してしまう。そんな最中、葵を軍にスカウトしようと、軍人が直接国際大学コロニーに乗り込んできて……。

序章

目を凝らすと多彩な色が見て取れる。

砂漠の赤、海の蒼、ジャングルの緑。

それらは宇宙には存在しない、自然という名の絵の具。闇の中で自ら蒼い輝きを放つ、地球だけに許された奇跡の色彩だ。

着痩せして見える長身を白衣に包み、その青年はポケットに両手を突っ込んで、足元の遙か先にある地球を見下ろしていた。

そこは、直径100メートル以上はあろうかという、浅い半円型を描いたドームの中央である。

素材が特殊硬化ガラスなので、ちょうど真下に地球を展望することができるのだ。

ここは宇宙空間に存在する、唯一の教育施設——静止衛星軌道十五番地にある、世界に名高い国際大学コロニーである。

色素の薄い、茶色の髪と瞳をした、それでも、生粋の東洋人とわかる青年は、正規の入学制度と異なり、特別な選抜制度によって国際大学コロニーの生徒資格を与えられた特待生であった。

青年は、澄んだ瞳で静かに地球を見つめていた。

豊かな自然、色鮮やかな景色、心地好い清風。大気に護られ、光に愛された蒼い惑星^{ほし}。

いつ見ても吐息を誘うほどに美しい、宇宙に浮かぶ地球の姿。

しかし、残念なことに、地上において人々の争いが絶えることはなかった。

端正な横顔に浮かぶ憂慮。その原因は、青年がいる十五番地の隣りに位置する、静止衛星軌道十六番地——軍区域と民間区域を隔てる宇宙空間をめぐる、軍と民間との陣地争いに端を発する。

そもそも十六番地は、国際大学コロニーの特別区域として十五番地と併合されていたのだが、先日の国際会議で宇宙施設空間有効活用のため、区域設定が見直されることになったのである。将来、民

事利用される宇宙施設建設予定区域として。

ところが、そこへ統合軍による十六番地接收計画が持ち上がったのである。

すでに宇宙ターミナル建設予算も確保された用意周到な計画であったが、軍の横行許すまじと、世界中で活躍する国際大学の卒業生らが主導して、軍の接收計画を阻むことに成功した。

静止衛星軌道の七割を軍が手中に収めている現状では、世論も含め、分は民間側にあつたからだ。

しかしである。残念ながら民間には、十六番地のスペースを埋めるべき肝心の計画、組織力、そして何よりも資金がなかった。

「……いずれ奪われるだろうな」

利益のためには手段を選ばない軍のやり口を熟知している青年は、冷静に予測してからふと気づいたように口元に笑みを剥くと、小さな声で呟いた。

「まあ、俺には関係ないか」

そうして、青年は踵を返す。

静止衛星軌道上にある国際大学コロニー内だが、生徒はもちろん教員などの一般関係者も立ち入ることのできない特別管理区域にある大展望室。

そこへの出入りを自由に許されている稀有な存在である青年は、扉の前で立ち止まり肩こしに振り返った。

至宝の惑星、碧玉の地球をふたたび視界に捉え、何を思い出したのか。

青年は自嘲にも似た微笑を浮かべて、その場を後にしたのだった。

漆黒の鏡に映し出された姿。

女性士官服に包まれた、ほっそりとした肢体。胸元の階級章は大尉——異例の出世コースを歩む証。

鏡の中の女性は静かに吐息を漏らすと、鏡に背を向け歩き出した。

そうして遠ざかるにつれてそれが鏡ではなく、室内の光がガラスに反射して映し出された像であり、ガラスの向こうの漆黒が宇宙空間だと認識できる。

肩の上で綺麗に切り揃えられた、真っ直ぐな黒髪。輝く大きな瞳は明るい紺碧。軍服に身を包んだ若々しい姿は、まだ20歳をいくつか過ぎただけと思われる。

「そういえば十六番地のターミナル建設計画、白紙撤回だつて？」

硬質的な感のある廊下を歩いている彼女の耳に、不意に入ってきたのは、兵卒たちの話し声であった。

「議会の承認が得られなかったんだと。地上^{した}の連中は何やってんだか、まったく」

民間と軍。

決して相入れぬ間柄であるのは、長い歴史を紐解いても明らか事実。現にこうして残された宇宙施設区域、静止衛星軌道十六番地を手中に収めんと、地上では火花を散らし争い合っているのだから、軍の宇宙ターミナル建設、それが白紙撤回されたという情報は、士官である彼女も当然ながら知っている。そして、強硬派が主流の軍上層部が先に取ったもの勝ちと、議会の承認を得ようと得まいと計画をそのまま進める気であることも。

わずかに顔をしかめた彼女が、足早にその場を立ち去ろうとした時だった。

「ウインクラー大尉！」

背後からの呼び声に、彼女は足を止めて後ろを振り返った。カードを片手に走ってきた通信士を目にし、彼女は怪訝そうな表情を隠さずに言った。

「定期連絡なら後にしてもらえますか」

だが、通信士は肩を激しく上下させ、一枚のメモリーカードを彼女に差し出しながら答えた。

「地上から緊急回線が開いています。暗証コードはこちらに記載されておりますので、至急、通信ルームにおいで下さい」

「緊急回線？」

眉宇を寄せてカードを受け取ると、彼女は通信士に急かされるまま歩き出す。

静止衛星軌道五番地——軍の宇宙施設では最大規模の軍事コロニーである。

巨大質量と自転によつて、地上と同様の重力下にあるここは、もう一つのコロニーとともに、人類が宇宙を手中に収めた象徴として存在していた。

幾度か通路を折れ、彼女が足を止めた扉は、士官級以上に使用を許された通信ルームのものであった。

中に足を踏み入れると、真つ暗な室内にモニターだけが光を放っていた。それは、さながら映画館のようだ。待ち構えていた別の通信士にカードを手渡して席に着く。ほどなくして目の前のモニターに、彼女のよく知る人物が映し出された。

異例の出世を続ける彼女のさらに上手をゆく、29歳の若さで統合軍最高幹部に名を連ねる、レオンハルト・F・ウィンクラー少将。彼女——マリーン・F・ウィンクラー大尉の実兄である。

緊急回線のため乱れる画像。そのため、当人の表情ははっきりとしないが、音声だけは鮮明に聞きとれた。ヘッドセットから流れてくるのは、いつも通りの穏やかな声色。

——内容や思惑に関わらず。

『時間がないので手短に話すよ。人事部からの通達により、ある作戦を実行に移すことになった。早い話がスカウト大作戦というところかな』

少し笑みを含んだその口調に、マリーンは表情を曇らせて口を開く。

「それは狭間研究所の如月博士のことでしょうか」

『読みが早くて助かるな。遺伝子工学分野においての卓越した頭脳、是が非でも欲しいとの軍部の統一見解だ』

兄の口から「是が非」という言葉が出るならば、それはもはや本

人の意思とは関係なく、誘拐まがいの身柄確保をも辞さないということ、マリーンはよく知っている。

しかし、狭間研究所の所在地は地上——日本の紀伊半島にある。確かに理由ありで軍とは一線を画する民間の施設だが、軍部が強硬手段に訴えなければならぬ必要性があるとは思えない。

そんなマリーンの疑問を完全に理解したうえで、画面の中の兄は言った。

『如月博士に地上でアプローチできるなら、何も君にこうして緊急回線を開いてまで話をしてはいないよ』

地上でのアプローチが不可能という言葉に、マリーンの顔がこわばる。

乱れた映像の向こうで、兄は苦笑にも似た表情を浮かべる。

『つまり高季教授がまたやってくれたわけさ。こちらの接触を絶つために、如月博士を特待生として国際大学コロニーに上げてしまったんだよ。相変わらず、こちらの計画の先読みにかけては天賦の才能を発揮して下さる。今回は完全にやられたということだ』

口ではそう言いながらも、楽観的に聞こえる声から察するに、今回の作戦の指揮は兄が取るわけではないのだろう。

『計画実行の指揮は』・パウエル中佐が取ることとなった。そこで中佐の上司の推薦で、副官として君が任務に携わることになったんだよ』

パウエル中佐ならばマリーンも知っている。敵地での交渉には限りなく向かない人物だ。とても行動をとにもする気になどなれない。第一それでもなくともマリーンにとって、あの場所は鬼門であるのに。

「閣下、小官が任命された理由をお伺いしてもよろしいですか」

『ああ、当てつけだよ』

あつさり答えた兄の言葉に、マリーンは深い溜息をつく。

今や他国という概念が消え去り、一つにまとまったとはいえ、しよせんは人間という種族の限界か、それとも軍とはそういうものな

のか、決して一枚板とは成り得ない組織である。軍部内は派閥主義体制が横行し、作戦の能率よりも、偏った人事が優先されるのが日常茶飯事だ。はつきり言って救いようがない。

まだ年齢こそ若い逸材だと軍上層部で高い評価を受け、さらに軍全体でも広く人望を集める兄の存在は、何かにつけ失脚を目論む輩の攻撃対象となる。今回は妹であるマリーンに、権限も責任も生じない副官としての任務をあてがったということは、確かに兄の称する通り当てつけなのであろう。

しかし、思惑がどうであれ、下されたのは正式な命令である。結局のところ、マリーンは断れる立場にない。

「では、シャトルで直接現地に赴けばよろしいのでしょうか」

気の乗らないマリーンの胸中を察してか、乱れた映像の中、兄は笑みを深くして目を細めた。

『いや、十六番地の件もあるからね。表向きの体裁を整えるため、地上から行ってもらうことになる。宇宙に上がったばかりですまないが、急いで本部に出向いてもらえるかな。渡しておきたい物もあるから』

「——了解しました」

通信が切れる。ヘッドセットを通信士に返し、マリーンは部屋を出た。

そして窓ガラスの向こう側、広がる漆黒の海に浮かぶ地球を視界に捉え、マリーンは忌ま忌ましげな表情で思う。

きつと何も変わってない。

このことと同じ有人コロニー。静止衛星軌道上に地球を挟む形で浮かぶ、マリーンが地上を経由して赴かねばならない場所——奇跡の船は。

マリーンは身を翻すと、鬱な気分を晴らすように軽快な靴音を響かせて歩き出す。

いつかは再会しなければならぬ相手、任務絡みであるだけ幾分かましだろう。

そう前向きに考えることにして、マリーンは地上に帰還するべく宇宙港へと向かったのである。

「まもなく終点、十五番地。国際大学コロニーです」

船内アナウンスの声に、手元の分厚い本に落としていた視線を上げた。シャトルが大気圏を抜けてから初めて、その人物は窓ガラスの向こう、宇宙空間を目の当たりにする。

21世紀半ば、あらゆる電磁波を完全に遮断できる物質の発見から、宇宙科学は短期間でめざましい発展を遂げた。現在、静止衛星軌道上には数多くの宇宙施設が点在し、地上と宇宙を結ぶ民間定期シャトルも週二便運行されているほど、この真空の空間は人類にとって遠い世界ではなくなっただ。

とはいえ宇宙に出られる機会が全ての人に平等に与えられたわけではなく、まだ一握りの人間の特権でしかない現状ではあるが。

『——それは綺麗だよ、地球が』

年齢や立場を忘れ、まるで子供のように瞳を輝かせ熱っぽく語ったのは、どの所員だったか。

初めて体験する無重力、初めて間近に望んだ宇宙、そして地上では感じることでできない、神秘の輝きを放つ地球という惑星の美しさ。

そんな昔の感動を忘れられない彼らと、今の自分は同じ立場に在るはずなのに、気持ちが高揚することなく、何の感慨も浮かんでこないのはなぜなのか。

主観の違いか、それとも感情が最初から欠落しているのか。
冷静に自己分析して、ふと思ひ直す。

そもそも、自ら望んで宇宙へ来たわけではなかったと。

ただ辛くて、離れられるならばどこでもよかった。

「……逃げ出したただけだ」

——あの人から。

高く澄んだ声で呟きを発した時、ドンツという鈍い音とともに、忘れかけていた重力が戻ってくるのを体感する。

シャトルの減速。それを数度繰り返した後、ふたたびアナウンスの声が船内に流れた。

「長らくお待たせしました。ただ今より当シャトルは、国際大学コロニーに着港いたします」

エアロックの隔壁がゆっくりと開いていく。

小さな窓からコロニーの全景を捉えることはできない。シャトルの大きさから推測しても、とてつもなく巨大な規模の施設だということがわかる。

古き伝説、神の高見を目指したバベルの塔は、神の怒りに触れ天罰を下された。だが現在、人類はこうして天をも手に入れ、そして神の禁域を犯した証である人間——自分がそこへ到達する。

天にあつて天罰とは何の意味を持つのか。

科学力によつて奇跡など形骸化しているにも関わらず、人はなぜ静止衛星軌道上に造られた人工物^{コロニー}を、奇跡の船などと称するのだろうか。

その人物は漠然と思う。

自ら望まず、国際大学コロニーを訪れた人物の名は如月葵^{きさらぎあおい}。遺伝子工学博士号を、わずか12歳足らずにして取得している天才児。やがて、その少年を乗せたシャトルは、ゆっくりとコロニー内へと船影を消した。

逃げ出した場所に奇跡の船を選んだことから、生まれて初めて後悔^{くわいご}という念に囚われることを、博士と呼ばれる少年はいまだ知る由もなく。

高度三万五七九〇キロメートル。

国際大学が地上からここ、静止衛星軌道上にキャンパスを一部移転して10年。いまだに世界一の規模と知名度、さらに尋常でない

受験競争率を誇る国際大学コロニー。

通称、^{ミラクルシップ}奇跡の船。

現存する宇宙施設を比較しても、民間では文句なしの最大級。
軍施設を含めても三本の指に入るといって、宇宙の学び舎であった。

第1話

静止衛星軌道十五番地、国際大学コロニー。

通称、奇跡の船。

コロニー人口の約七割が大学生と院生で占められる奇跡（うつくし）の船は、地上の国際大学本校同様、国際教育委員会の管轄下におかれる施設でありながら、宇宙空間という特異な場所に存在するため、実質上大学運営は学生の中から選ばれた生徒らで構成する、執行部と称される自治組織が行っていた。

自由な環境、自由な精神、それこそが奇跡に等しい結果を生む。

国際大学コロニー初代学長の訓辞、そのままに。

もちろん、当初はこれだけの施設運営権全てを学生に委ねることに対して、地上の本校などで問題視する声は数多かった。

しかし初代学長の言葉通り、自由ゆえの素晴らしい研究成果、それら実績の積み重ねにより、学生（かれ）らは委員会や本校による一切の干渉を受けない学生主権を確立させたのであった。

強大な執行部の権限——それはまさに、学生天国といえるだろう。超法規的に守られた自由の箱船、学生の夢を現実にできる場所、それが奇跡の船たる所以と称されるがごとく。

そんな、地上の学生にも英雄視されてやまない、栄えある奇跡の船の執行部はというと、コロニー区のほぼ中央、居住区と学部の間位置する一室に代々拠点をかまえていた。

現在そこに居るのは、珍しく集合命令のかけられた現執行部役員たち。

だが、その表情は一樣にして冴えなかった。

「どうでした、アクアさん？」

嘆息して内線電話の通話を終えた様子から察するに、聞くだけ無駄なのだろうが、それでも一応尋ねたのは、部屋にいる3人の中で一番若い青年である。

栗毛で琥珀の瞳、英国生まれ米国育ちの彼の名は、アルフレッド・クライトン。

工学部宇宙航空工学専攻。真面目で努力家、大学一回生でありながら執行部役員に選ばれた、同学科首席のとても優秀な学生だ。

「もともと学部の方には滅多に寄りつかないのを失念していたわね。ここ二週間、姿を見た人間はいないと断定されてしまったもの。たぶん、管理区のほうに籠っているんだわ」

まったく困ったものねと、ばやく台詞とは裏腹に暖かい微笑を浮かべたのは執行部の紅一点。

容姿端麗、頭脳明晰と国際大学本校でも有名な医学部院生、アクア・フレイ・シャンパーニュ。翡翠の瞳に長いブロンドの髪、フランス国籍である。

「うちの会長がその気になれば、二週間でも一ヶ月でも行方不明になれるだろうしな」

そう溜息交じりに呟いてテーブルに頬杖をついたのが、工学部機械工学専攻の特待生、エドウィン・スミス氏。

国際大学のお膝元である米国セントルイス出身。黒髪にダークブラウンの瞳、そして惚れ惚れするほどの見事な体躯の持ち主だ。

由緒ある軍人の名家に生まれ、恵まれた肉体と能力と血統によって軍のエリートコースを歩んでいた彼が、何をとち狂ってか突然軍を除隊し、周囲の猛反対を蹴散らした挙句、特待生として奇跡の船にやってきたという一風変わった経歴を持つ人物である。

気さくな性格と人好きのする風貌で、工学部の生徒から絶対の信頼を受ける彼は、名前ではなく、少佐の愛称で呼ばれている。

以上が、現在この部屋にいる執行部の面々で、目下行方不明となっている会長を含めた四人が、国際大学コロニーを事実上牛耳る学生の代表陣であった。

「いつもいつも雲隠れ、まったくクラゲみたいにふらふらと。あいっには執行部会長としての自覚がなさ過ぎるんだ」

堪忍袋の緒が切れたのか、アルフレッドが憤慨して声を荒げるが、

これはいつもの事。アクア女史に一目惚れしたと周知の事実であるアルフレッドにとって、まさに現会長は天敵に等しいからである。

何事にも囚われないというか、何に対しても執着心がないというのか。少佐曰く、糸の切れた風船のような生き方をしている彼。

選ばれた優秀な学生だけが学べる奇跡の船において、最も秀でた者だけが名を連ねることを許された執行部。その頂点に立つ会長でありながら、アルフレッドの指摘通り、本人には自覚が皆無であった。

執行部会長職など、講義をサボる口実だけには便利と称して憚ることなく、投げやりとも取れる態度が一部の人間に反感を買い、新期の会長選では毎回数十人が立候補する激戦となる。

にも関わらず、これまで連続して会長職に当選してきたのは、彼の才能とカリスマ性あってこそといえるだろう。

電子工学にかけては世界最高の評価を受ける、優れた頭脳と感覚をもつ超天才。

均整のとれた長身と眉目秀麗な外見に加え、ここぞという時には見事な手腕を発揮して問題解決してきた、輝かしい実績に裏付けされた指導力。それは彼の性格を毛嫌いしているアルフレッドですら認めざるを得ない、歴とした実力だ。

とはいえ、天賦の才能を奇跡の船のマザーコンピューターに細工して行方を暗ませるという、実にろくでもないことに使用する悪癖そして、アクアの片思いの相手、つまりアルフレッドには恋敵であるという事実。

これが、アルフレッドに天敵扱いされる主な原因であった。

「まあ熱くなる気持ちもわかるが、怒ったところでヤツが悔い改めるはずもないし。疲れるだけだと思うぞ、アル」

少佐がアルフレッドの頭をぽんぽんと叩く。

完全に子供扱いだが、相手が十も年の離れた少佐となれば素直に引き下がるしかない。

アルフレッドは、ふてくされたように口を噤む。

そんなふたりを見ながら、アクアは優雅に立ち上がった。

「如月博士のシャトルは直行便ではなかったのでしょうか？」

「あ、はい。宇宙医療センター経由でしたから、3時到着の予定で
す」

アクアの問いに答えて時計を見たアルフレッドは、驚きに目を瞬
く。いつのまにか、時計の針は3時を差そうとしていた。

「私では役不足だろうと思うけど、博士を迎えに行ってくるわね」

そう言っって長いブロンドの髪をたなびかせ、アクアは扉横の開閉
パネルに手を延ばした。

何気ない仕種にも感じられる芸術的美しさに見とれていたアルフ
レッドが、恍惚としながら口を開く。

「すみません、本当は会長の仕事なのに」

そんなアルフレッドの台詞に、アクアは肩越しに振り向いてにつ
こりと笑った。

「いいのよ、ポイントは稼いでおかなくちゃ」

他人が自分に向ける恋心にはまるで鈍感な彼女は、他意もなく、
アルフレッドに無情な一言を残して姿を消した。

「……ご愁傷さま」

短くも長くもない沈黙の後でかけられた少佐の言葉に、アルフレ
ッドは服の袖で目尻を拭うしかなかった。

第2話

文明の発祥から、科学は常に進歩を続けてきた。

平和的なものから軍事的に流用されたもの、そして地球の環境を激変させ、人類の存亡を危うくしてしまうものまで千差万別、それこそ科学者の数だけ、科学は歴史に名を残す発展を遂げてきたのである。

そんな輝かしい歴史において、21世紀初頭から半ばにかけては時代が科学の進歩を望んだのか、人類は黄金期と呼ぶに相応しい、数々の画期的な最先端科学技術を生み出す。

中でも宇宙科学の発展は目覚ましいものだったが、その最たるものは何といつても生体情報伝達システム——ニューロンネットワークNeuron Network Systemであらう。

情報システムが乱立していたことによる電子的混乱を収集するため開発された、全世界はおろか宇宙施設をも網羅した情報伝達システムがある。それをさらに、人間の神経伝達をベースに基礎理論から再構築し、11年前に始動されたバイオロジカル情報伝達システムこそがそれであった。

ハードとソフトの両面の性質を併せ持つ、通称NNシステムは、現代の電子社会が望んだ以上の性能を備え、おかげで進展に長い時間が必要だった遺伝子工学や宇宙科学工学も、このNNシステムの起動により短期間で目覚ましい躍進を遂げたのである。

NNシステムこそ、今世紀最大と謳われる科学の偉業だ。

有人宇宙施設が絶対的安全下に存在しているのも、宇宙と地上を結ぶシャトルが飛び交っているのも、一般個人が携帯する通信端末から通貨取引部門などの国際的情報処理に至るまで、全てを統括、かつ合理的に運用している最先端エレクトロニクス——ニューロン・ネットワークシステムがあつてこそその世界なのであった。

もっとも、民事利用目的で開発されたNNシステムは軍では使用

されていない、あくまでも民間だけに限られた特権であったが。

遺伝子工学研究施設としては最高峰と評価を受ける狭間研究所。

国際大学コロニーを卒業した遺伝子工学系の優秀な卒業生も、多くはこの研究所に研究員として着任している。

その狭間研究所において現在副所長を務めるのが、12歳にして博士号を取得している天才少年だと、もちろん奇跡の船でも広く知られていたが、実際に本人を目の当たりにすると驚きを禁じ得ないものであった。

ふんわりとした薄い茶色の髪に、まるで少女かと思ふ可愛らしい顔立ち。日本人で12歳ということ踏まえても、年齢以上に幼く見える細くて小さな身体と、そして耳に心地よく響く高いボーイソプラノ。

「狭間研究所から参りました、如月葵と申します」

おかげでアルフレッドなど驚きのあまり、少佐に後頭部を小突かれるまで開いた口が塞がらないといった有様であった。

「こちらがエドウィン・スミス氏。博士と同じ特待生として、ここで機械工学を専攻されています。そして執行部唯一の現役大学生、アルフレッド・クライトン」

宇宙港から執行部室に案内してきたアクアは、葵に普段と変わらない柔らかな物腰で2人を紹介する。

「よろしく、如月博士」

短い挨拶とともに、気さくな笑顔をみせて握手を交わした少佐に対し、アルフレッドはまだ驚きを隠せない様子で、やや引きつった笑顔を浮かべながら頭を下げた。

「工学部で宇宙航空工学を専攻しています。すみません、専門違いで博士のことはよく存じ上げなくて」

能力重視の現代。たとえ子供であろうと、すでに社会で認められた地位を有しているのである。

失礼なことをしたと率直に謝るアルフレッドに、葵は整然とした態度で礼儀正しく言葉を返す。

「慣れていきますから、お気になさらず」

初めて会った相手の反応は、みんな同じだと葵は思う。

こんなに幼いのかという驚き、そして、こんな子供に従わなければならぬのかという憤り、だ。

少佐とアルフレッド。彼らに後者の反応がないだけ、地上の連中に比べれば数段ましだった。

そして葵にとっては、反応が同じである方が好都合でもある。

周囲を拒絶することでしか自分を守る術を知らない少年には。

それなのに――。

狭間研究所に昨年の夏着任した、遺伝子工学分野で世界的権威と知られる現所長は、副所長として初めて会った葵に対し、何ら偏見を持たなかったどころか、屈託のない笑顔とあけっ広げな好意を向けたのだ。

高季教授。

他にもない。葵を国際大学コロニーの特待生に推薦した人物――。

「どうぞ」

アクアの優しい声に、ハツとして葵は面を上げた。

いつの間にかテーブルの上には、アクアの手で紅茶のセットが並べられていた。カップから室内に広がる、豊かな紅茶の香り。

自覚する以上に疲れているのかもしれないと、葵は表情を引き締めてテーブルに歩み寄る。

緊張感は常に持続しておく必要がある。

それこそが狭間研究所で培った処世術に他ならないから。

こんなところで隙を見せるわけにはいかないのだ。そうでなければ、新たな身の置き場を求めて宇宙までやって来た意味がないのだから。

硬質な雰囲気を纏ったまま、椅子に腰掛けてカップを手取る葵。その様子をアクアは静かな眼差しで見ていたが、やがて肩の力を抜

くと、彼女はすまなさそうな表情で話を切り出した。

「重ね重ね申しわけありません、博士。本来ならば執行部会長が迎え入れるはずだったのですが、残念ながらご紹介できそうにありませんの」

苦い顔のアルフレッドと少佐。彼ら2人の表情を見比べながら葵は尋ねる。

「……地上ですか？」

大学の学生は、地上の本校とコロニーを行き来しているという。

そう思って葵は口にしたのだが、アクアの答えは複雑だった。

「いえ、そうではなく所在がなかなか掴めないもので。博士が特待生としてここへ来られることは知っているはずですが、今日到着することを伝えられなくて」

「単なるサボリですよ」

歯切れの悪いアクアの説明を一言で言い切ると、アルフレッドはムスツとしながらカップに口をつける。先ほどの傷心が尾を引いているようだ。

「滅多に執行部室にも寄りつかない、執行部発足以来、最悪と評判の高い素行不良の会長なんだ。まあ、何かと忙しいから無理もないが」

少佐が苦笑しながら話をまとめる。

運営が学生に一任されている国際大学コロニー。その運営権を掌握しているのが彼ら、執行部の人間——つまりは、選ばれた人材の**はず**なのだが。

会長職にある人間が素行不良？

いくら興味のない事とはいえ、国際大学コロニー執行部の知名度の高さは承知している。

信じがたいと思う葵の心情を読んでか、苦い表情のままアルフレッドが口を開いた。

「本人のやる気を別にすれば、彼は最も会長に相応しい人物ですよ。特待生でありながら、コロニー管理部の職員でもある。ここのマザ

「コンピューターのメンテナンスを任されているほど、電子工学においては、地上を含めて彼の右に出る者はそういない。そして何より、10年も特待生として奇跡の船に在籍している実績もある」
本人のやる気、という部分を強調しながら、アルフレッドは肩を竦めた。

「コロニー管理部の職員。しかも、マザーコンピューターのメンテナンスということは、学生でありながら宇宙技術者でもあるということだろう。」

それならば多少人格に問題があろうとも、より強力な権限を行使できる人材を会長に選ぶのは当然かもしれないと、そこまで考えて葵はハッと息を呑む。

10年。

国際大学コロニーの特待生は、自身も含めて5人と葵は聞いていた。1人が大学卒業資格を有し、残りはそうではない、つまりは18歳以下の者と。

その中で大学卒業資格を有する1人とは、きっと隣りに座るスミス氏であろう。

ということは、残る18歳以下の3人に入り、10年も特待生である執行部の会長は、一体何歳から宇宙にいるのだろうか。

そして、どういう人物なのか。

さすがに、葵は怪訝そうな表情を浮かべた。

その横顔を黙って見ていたアクアは、少しだけ言い淀みながら葵に告げた。

「……今年17歳になる高季彬^{たかすえあきら}。博士もご存知でしょう、この初代学長でいらした高季教授のたった1人のお孫さんですわ」

ガタンと大きな音を立てて、葵の座っていた椅子が後ろに倒れる。突然立ち上がった葵の顔色は蒼白になり、両手をついたテーブルの上で、紅茶の入った白磁器のカップが小刻みな音を立てた。

同時に、葵の耳にあり得ない声が蘇る。

『——奇跡の船を知っているかい？』

いつも通りの優しい笑顔で尋ねてきたのは高季教授。その問いに対して、

『国際大学コロニーならば知っています』

と、嫌みと承知した上で答えたのは葵自身。

国際大学で長く教鞭をとっていた高季教授は、大学を辞めた後、狭間遣伝子工学研究所に所長として着任した。遣伝子研究の分野では、世界的権威として名を馳せている人物である。

温和な人柄で広く人望もあり、先生と呼ばれる人間にありがちな偉ぶった態度などまるでない。豊富な知識、70近い年齢を感じさせぬ会話術。

自分が知る歴代の所長たちの人格と比較して、研究所所長には最も相応しい人物だと、葵は初めて思った。

なのに、募る奇立ち。発散しようのない腹立ち。

教授を認めたのは自分自身であるというのに、どうしようもなく一緒にいることが苦痛と感じるようになってゆく。

自分でも理由のわからない負の感情、それが体調にまで影響を及ぼし始めた頃だった。

特待生として国際大学コロニーに行ってみないかと、教授から話を持ちかけられたのは。

その申し出を葵は即、承諾した。

何よりも嫌いだった言葉 奇跡 —— その名を冠した国際大学コロニーへ行くことに抵抗は確かにあった。だが教授から離れられるのなら、この胸の痛みから解放されるのなら、たとえ行先が奇跡の船だろうとかまわなかったのである。

追い詰められていた。

だから逃げ出した。

大気圏すら超えて。

高季教授から逃れたい一心で。

なのに、そこで待っていたのが高季教授の孫という。

それだけで、葵はキリキリとした胸の痛みを覚える。ただ意味もわからないまま。

アクアの言葉を聞いた途端、豹変した葵の態度。発言したアクアも含めて、一同は哑然として声も出なかったが、ようやく少佐が葵の様子を慎重に窺いながら尋ねた。

「如月博士、大丈夫ですか」

低く落ち着いた声の調子。^{トーン}

少佐の声に、葵は青ざめた顔色ながらも、平静を装いつつゆつくりと面を上げた。

そして、心配そうに見守る3人に対して何でもないと答えようとした、まさにその時だった。

葵の正面の扉がスライドして、新たな人物が部屋に入ってきたのは。

「——どうしたんだ、勢揃いして」

部屋に入るなり意外そうな声を上げた、白衣を着た背の高い青年。彼は眼鏡を人差し指で押し上げながら周囲を見回し、そこで初めて葵の存在に気がついたようであった。少しだけ目を細めると、訝しげに口を開く。

「この小僧^{ガキ}、何？」

この世の終わりとばかりに天を仰ぐ少佐。

さすがに弁護もできないと、静かに面を伏せたアクア。

そして、アルフレッドは怒りに身を震わせながら、ゆらりと立ち上がった。

「……お邪魔みたいだから、出直すことにしようかな」

尋常ならざる雰囲気危機感を覚えたのだろう。背後の扉へと後退りする彼であったが、地の底を這うような凄みの利いたアルフレッドの声がその足を止める。

「先々週、本校から打診があった時に伝えたはずだよな。狭間研究所から特待生として、同研究所副所長が来られるって。こちらが、

ご本人でいらつしやる如月博士。すでに博士号をお持ちで、遺伝子工学分野では高季教授に継ぐ実績を上げておられる方だ」

聞けば誰もが驚く葵の経歴。

しかし彼はまったく驚いた素振りをみせなかった。それどころかすぐに葵の傍にやってくると、端整な容貌に満面の笑みを浮かべて言った。

「これは失礼を。国際大学コロニー、奇跡の船にようこそ。何かお困りの際はいつなりと執行部までお申し出を、では」

慇懃な挨拶を言い終えると、即刻、彼は身を翻して部屋を出て行くとした――が、その敵前逃亡を見て、ついに怒りが限界に達したアルフレッド。

ぷっつんキレてしまった。

「ではって、どこに行くんだ。執行部の会長が彬、お前だろ！」

怒声とともに、高季彬は宙を舞った。

硬直する葵の目の前で電光石火の見事な背負い投げを披露したアルフレッドが、小柄な身体ながら、実は世界選手権で優勝経験もある凄腕の柔道有段者であることを、葵は後で知ることになるのだった。

第3話

往生際の悪い彬と、頭に血がのぼると周りが見えなくなるアルフレッドのせいで、葵を迎えてのティータイムを滅茶苦茶にされたアカア。

いくら心優しい彼女でも、不機嫌にならないはずがない。

深く反省するアルフレッドと、釈然としない表情でまるで懲りていない彬を見やって、アカアは大きな溜息をつく、入れ直した紅茶を各人に配りながら言った。

「一般学生の責任をとるために執行部があるように、執行部の責任をとるために会長がいるのだから、この場合、彬に責任をとってもらいます。今後一ヶ月間は絶対に行方を暗ませないように」

「一ヶ月!? 冗談じゃない!」

よほど束縛されるのが煩わしいのだろう。彬は猛然と異議を申し立てた。

だが、

「問答無用、承知するまでアルフレッドに組み手してもらってもいいのよ」

と、アカアにしては珍しく、彬相手に一步も引かなかった。

執行部役員の中で一番の良識家であるアカア女史にここまで言われては、会長といえども無条件降伏するしかない。足を組み替えて、そつぱを向きながら答える。

「わかりました。一ヶ月間、定時連絡を入れさせていただきます」

これ見よがしに舌打ちして、鬱陶しげに前髪をかき上げる彬。

そんな彬の横顔を見つめながら葵は思う。

高季教授とは似ても似つかぬ人物だと。

葵が教授に対して居心地悪いと感じてやまない、全てを見透かすような瞳と暖かな雰囲気。高季教授の孫であるという彬からは、そ

のどちらも感じ取れなかった。

けれど――眼鏡の奥に隠された、透けるような茶色の瞳。

何が秘められているのかわからないが、なぜか、彼にはあまり近づかない方が良いと葵は感じた。

直感だ。

だから、自分の視線に気づいた彬がこちらを見た途端、葵は面を伏せてしまう。

それに対し、彬の方かというと、明らかに自分を避けている葵の態度に少し首を傾げたものの、すぐに興味を失ったようで葵から視線を逸らせた。

「そういえば、彬は何の用だったんだ？」

そんな二人の様子を見ていた少佐が気まずい雰囲気を感じてか、のんびりとした口調で彬に尋ねた。

そもそも用がなければここには寄りつきもしないだろう、と少佐がつけ足すのを聞いて、彬は背負い投げで忘れてしまっていた肝心の用事を思い出した。

「ああ、そうそう――って和んでる場合じゃない。何なんだ、あの広場の有様は！？」

首輪を付けられることを承知して執行部室に寄ったわけではないが、多少文句を言われても仕方がないと、彬があえて姿を現わしたのは、久しぶりに通り掛かった中央公園広場の様変わりに目を剥いたからである。

「ああ。あれなら集会の許可願いが執行部と教授連宛てに出てるよ」書類管理など雑務のほとんどを任されているアルフレッドが、一枚の紙を彬に差し出しながらあっさり答える。

中央公園というのは文字通りコロニー区の中央に位置する、学生を対象にした憩いの公園のことである。

その中心にある広場というのが、学祭時など奇跡の船を挙げての行事の際、執行部の本部設営場所に用いられるように、所属学部関係なく人を集める場合に最も適した場所なのであった。

逆にいえば、そこでの集会は執行部主催の総会に等しいと位置付けられるため、中央公園広場を使用するには用途の趣旨を記載の上、執行部と学校側たる教授連の許可が必要となっている。

つまり、そうそう簡単に使用できる場所ではないのだ。

アルフレッドから受け取った書類に目を通すと、彬は心底から脱力する。

「こんなの、教授連がよく許可したな」

書類に記された現学長の署名は本物であった。執行部側は無論会長である彬自身のものが必要なのだが、行方不明であったため彬以外の執行部役員、アクアとアルフレッドと少佐の連名で署名されている。これで略式ながら許可済みということになる。

「こんなのっていうけど、この件に関しては教授連も全面的にバックアップするからって、執行部に連絡があったくらいだよ」

「各学部の総代からも演説に参加したいって直訴しにきてたしな。まだ本決まりじゃないが、地上の本校との合同主催案も出てるらしいぞ」

アルフレッドと少佐が口を揃えて言った。そして、駄目押しとばかりにアクアがきっぱり言い切る。

「奇跡の船の総意ってことね」

テーブルの上に書類を放り出して、彬は天を仰ぎながら呆れ顔でぼやいた。

「反軍運動がかよ」

執行部と教授連の許可済みの集会。その目的とは、静止衛星軌道十六番地軍接收計画に対する抗議集会であった。

広場に設けられた特設ステージの上には「軍の横行許すまじ、十六番地を死守すべく戦おう！」と、すでに大横断幕が掲げられていた。

「だってそうだろう。十六番地は本来奇跡の船の管轄区域、つまり僕たちのものだ。それを有効利用とかで静止衛星軌道の区域分けを勝手に見直して、軍のターミナル建設のために奪うなんて許せない

じゃないか」

アルフレッドが熱っぽく語るのを、どこか冷やかな眼差しで見やる彬。

「あのな、静止衛星軌道の区域見直しは議会主導で行われたんだよ。有人コロニーの安全が確立されていなかった頃だったから、ここ十五番地と隣りの十六番地が奇跡の船の特別区域に仮設定されてたんだ。別に軍の横槍じゃない、限りある静止衛星軌道を遊ばせておくのは勿体ないからだよ。まあ、虎視眈々と軍が機会を窺っていたのも事実だから、全くのシロってわけでもないけどな」

年が若いとはいっても、その辺りの事情にもっとも精通している彬である。

「わかったよ。でも、集会の許可を取り消すのは反対だからな」

仕方なく引き下がることにしたアルフレッドだが、一応念押しとばかりに両腕を組んで宣言する。それに対し、彬は大きく肩を聳そびやかせ、口元に笑みを浮かべて答える。

「別に反対はしないさ。総意なんだろう、奇跡の船の」

彼らのやり取りを黙って聞いている葵に、アクアが小さな声で一応説明をする。

「博士はご存じないでしょうが、静止衛星軌道十六番地という最後の民間宇宙施設用スペースを、軍がターミナル建設のため接收しようとしているんです。そこが以前国際大学コロニーの管轄区だった経緯に加えて、もし軍区域に指定されれば奇跡の船と隣り合わせになるため、皆が神経を尖らせているんです」

だが、説明を受けても葵にとって軍など遠い存在でしかなく、そのためか、何の反応も示さなかった。

そんな葵を複雑な表情で見つめていたアクアだったが、眼前で繰り広げられている彬とアルフレッドの言い争いが次第にエスカレートしてゆくのを察して、葵から視線を二人に転じると強引に会話に割り込んだ。

「各学部の総代も絡んでくるなら、執行部主催として進めるのは当

然。なら細部の調整はこの場ではなく、集会企画者を交えて行うべきよ。会長として彬の意見は集会には反対しない、それでいいんでしょう？」

アクアの言葉にアルフレッドはすぐに口を閉ざしたが、彬は定期連絡を強要された件も含め、よっぽど不満だったのだろう。皮肉げに口端を歪めて笑ってみせた。

「結構ですよ。必要ならば呼んで下さい」

この件を認めはするが、自分は絶対に参加はしないと暗に明言して立ち上がる。そして、用は済んだとばかりに部屋を出て行こうとしたのだが、ふたたびアクアの声が彬の足を止めさせた。

「まだよ、執行部の仕事が残っているわ」

「執行部の仕事？」

彬は訝しげな目をアクアに向けた。

その視線を真正面から受け止めて、アクアが答える。

「如月博士の案内役よ」
ホスト

「——え？」

驚いて声を上げたのは彬ではなく、案内される側の葵であった。

アクアは、彬から視線を逸らすことなく先を続ける。

「本校から通達があつたのよ。宇宙生活に慣れるための準備期間を得ず、ここへ急きよ来られることになった如月博士のホストを執行部が引き受けるようにと。だから、一人一週間交替で博士のフォロ―を」

「ちょっと待って下さい。確かに案内役は必要だと思いますけど、全員でなくとも誰かに一任したほうが……」
ホスト

アクアの話を聞くなり、アルフレッドが慌てて口を挟んだ。アルフレッドにしても初耳だった。

「遺伝子工学ということを考えれば、女史が一番適任じゃないか？」
遺伝子工学部と医学部との繋がりを上げて、少佐がアルフレッドの意見に賛同する。

さらに案内を受ける葵が、この時ばかりは必死になって訴える。

「あの、案内など必要ありませんから」

だが、アルフレッドたちの提案や葵本人の訴えなど、アクアは最初から聞く気がなかったようだ。

「決定事項です。―― 杉は最後の四週間目、いいわね」

彼女らしくもない強い口調。

そんなアクアを黙したまま見つめていた杉は、やがて長い沈黙の後、眼鏡の奥の目を細めると低い声で呟く。

「お前、何を――」

何を隠しているんだ。

そう言いかけたのだが、その問いは完全な言葉にはならなかった。なぜなら凄まじい轟音とともに、強い揺れが一同を襲ったからである。

ドォォン。

振動は足元から一度。

テーブル上のカップが散乱する。床に落ちて割れなかっただけ幸いであつただろう。

「―― 地震!？」

「ここは地球じゃない」

日本からやって来た葵が思わず口走った言葉を、間髪入れずに否定したのは国籍を同じくする杉である。

地震ではない。だが、地球でないことが一番怖いのだ。宇宙に浮かぶ奇跡の船での振動は、重大な事故を連想させるから。

アルフレッドが体勢を立て直して叫ぶ。

「一体何だつていうんだ!」

ただならぬ事態に青ざめる執行部役員の面々。その混乱の中で、杉の行動は素早かった。杉は部屋の奥にあるコンピュータ端末に駆け寄ると、状況を調べにかかる。

管理部の施設監視回線に強制的に連結させる。^{リンク}奇跡の船の特待生としてではなく、コロニー管理部に技術員として籍をおく、杉なればこそその芸当だ。

そんな彬を見守りつつ、息を殺した数十秒。

「……なるほどねえ」

緊迫した雰囲気を一掃するかのように、彬の口からは実に楽しいな声が漏れた。

「どういうことだ、彬」

端末のモニターが彬の背中で見えないため、心配そうに少佐が尋ねる。

彬は内線専用電話を取り上げ、ある番号をプッシュする。そして相手が出るのを待たず、少佐にそのまま放り投げた。

「まずは内輪の方がいいだろう？」

内輪という彬の言葉。敏感に反応したのは、少佐とアルフレッドである。

「――工学部!？」

二人が不安げに見つめる受話器は、数回のコール音を刻んだ後、向こう側の様子を伝えてきた。

それは紛れもない歓声。

一瞬、啞然とした少佐とアルフレッドだったが、受話器の向こうからかすかに聞こえてくる知った声に、すぐに少佐だけが事態を察して顔を強張らせる。

その表情からは何が起きたのか、すでに理解していると思われるが、それを信じたくないのだろう、少佐は祈るような面持ちで受話器を手にして口を開いた。

「……おい、お前ら……」

『あつ、少佐ですか。やりましたよ、新型ブースター！馬力は従来の八倍、燃費は二割減、精度と安全性は段違い』

工学部機械工学科が民間企業の資金援助を受け、次世代シャトル開発のためにロケットブースターを制作していたのを、少佐はもちろん知っていた。おかげで地震の真相が何であるのか、確認するまでもなく察することができたのだ。

「お、お前ら……外壁に取りつけて実験しやがったな!」

執行部の仕事が忙しくなり、少佐がちょっと目を離れた隙の出来事だ。

実験区の工学部専用スペースでは収まりきらない、ロケットブースターの試作品。コロニー管理部保安課の監視を逃れ、ほんの数日で外壁に取り付け、実験まで成し遂げたのは見上げた根性であるといえるだろう。

無論、褒められたものではないが。

しかし、悲しいかな、少佐の怒声は歓声にかき消されて、狂喜乱舞する電話の向こう側には届かなかった。

少佐は、ガツクリと肩を落とす。

「まあ、そっちは落ち着くまで待ったほうがいいとして、深刻な問題とやらは機工科じゃない」

眉間に皺を寄せて沈鬱な表情を見せる少佐とアルフレッドに、彬は真剣な眼差しで告げた。

「外壁から直接電気を確保するなんて無茶したせいだな。電圧が急激に下がって、工学部A3ブロックで数秒間停電したんだよ」

たった数秒間の停電。

その言葉に安堵の表情を浮かべた少佐だったが、それと対照的にみるみる顔面を蒼白にしたのはアルフレッドである。

「ほ、補助電源と安全装置は！？」

アルフレッドが血相を変えて彬に詰め寄ったが、返ってきた言葉は無情なものだった。

「緊急復帰する時にブロック全域で電気が逆流——バックアップ機関は絶望視だな」

この時間、工学部A3ブロックで何が行われていたのか。そのことを理解している、同学科のアルフレッドは泣きそうな声で呟いた。「……来期の航法プログラム、最後の仕上げにかかったのに」

シャトルを運行させる宇宙航空管制システムのプログラムを全面委託されている宇宙航空工学科。

二ヶ月という期間を費やして、学科全員で作成したプログラムデ

「夕は、同じ工学部の非常識実験のせいで水泡に帰したのであった。きつと……今頃みんな、真っ白な灰に燃え尽きてるんだろぅなあ」電子機器だけが光を放つ暗い部屋で、飛んでしまったデータが完全に失われたことを知って、呆然と立ち尽くす数十人。石像と化した彼らがふたたび動き始めるのは、一体いつになることやら。

遠い目をして語るアルフレッドの背中を見つめながら、複雑な立場上、少佐は慰めの言葉さえ口にできなかった。

「悪いけど、学部の方に戻るから」

棒読みでそう告げたアルフレッドは、がつくりと肩を落とし、悄然と部屋を後にした。

続いて彬も部屋を出てゆこうとして、扉の前で少佐を振り返る。

「少佐、工学部の総代と開発チームの責任者を確保してくれ。相談したいこともあるし、始末書も一枚や二枚じゃないからな」

「彬はどこへ行くんだ？」

少佐の問いに、彬は白衣のポケットに両手をつっ込んで肩をすくめてみせる。

「責任者は責任をとるためにいるんだろ。教授連の呼び出しがくる前に、こちらから出向くことにするさ」

そして、散乱したカップを集めているアクアと葵の方を見やった。

「仕事は忘れてませんよ、女史。それでは三週間後にお会いしましょう、如月博士」

彬の殊勝な言い様そのものが嫌みだとわかるので、アクアは悲しげに綺麗な瞳を曇らせる。

しかし、彬は彼女の心情など顧みようとせず、そのまま白衣の裾を翻して扉の向こうに姿を消した。

「大人げないな」

やれやれと少佐が大きな溜息を漏らしながら言つと、アクアは微笑を浮かべて答える。

「仕方がないわ。久しぶりに会ったのに、あんまり平然としてるか。悔しくて、愚痴ついでに苛めてしまったもの」

その返事に、少佐は眉をひそめる。

「愚痴、ですか？」

「そういうこと」

彬当人も察していたが、アクアが意図して彬を葵に関わらせようとしているのは明らかだ。あの場で変だと感じなかったのは、アルフレッドと葵本人くらいだろう。

――何を隠しているのか。

彬が言えなかった問いを、少佐がこの場で遠回しに聞いてみたのだが、アクアはまるで答える気がないらしい。また、少佐も深く問い詰めようとは思わなかったので、すぐに話題を転じた。

「それで、如月博士のホストの件はどうします」

「実はアルフレッド、少佐、私の順で考えていたのだけれど、学部の方があの有様では難しいかしら」

テキパキと後片づけをしながら、アクアが困ったわねと呟きを漏らした。

そんな二人のやり取りを聞いていた葵が遠慮がちに、しかし、淀みなく口を開く。

「――本当に私は案内など不要ですから」

元々、自らが望んで来たわけではない。単なる成り行き上、逃げ場に残っただけの場所なのだ。

そんな葵の胸の内を知ってか知らずか、アクアの返事は、葵の気をさらに重くさせるものであった。

「博士はご自身の知名度を自覚されてませんわ。遺伝子工学を専攻する者にとって、狭間研究所は憧れの聖域なのです。ゆえに研究所の現副所長にして、生体遺伝子研究の第一人者でいらっしゃる如月博士は、奇跡の船にとって超一級の要人（VIP）」

少佐が続ける。

「簡単に言ってしまうえば、飛んで火に入る夏の虫。執行部のホストなしでは日常生活すらまともに送れませんよ、絶対に」

力説する彼らを前に、葵はそれ以上断るべき口実を見出だせず、

こうして地上では予想もしていなかった、波乱に満ちた宇宙でのキ
ャンパス生活が幕を開けたのだった。

第4話

太平洋中西部ミクロネシア東部、マーシャル諸島にあるマーシャル宇宙センター。

世界各地に点在する軍の宇宙用地上施設の中でも、最大の規模を誇る基地である。

滑走路ではコロニーから先程到着したシャトルが、いまだ待機状態のまま移動もできずにいる。上層部の指示で急きょ降りて来たため、シャトル用の格納庫が準備できていないのだろう。

その機体で地上に降り立ったばかりの女性は、待合室のガラス越しに宇宙センターの全景を眺めていた。

宇宙から見た地球と同じ色彩を瞳に宿した彼女の名は、マリーン・F・ウインクラー大尉。

先月二十三歳になったばかりの年若い彼女だが、次の人事では、すでに少佐への昇進を約束されている優秀な若手エリート士官である。

「ウインクラー大尉」

名を呼ばれて振り返ると、基地作業服を着た壮年の男性が立っていた。手にしていたボードを差し出しながら男性は言う。

「お寛ぎのところ申しわけありませんが、ワシントン本部乗り継ぎのご案内に参りました。まもなく到着する軍用機の保守点検作業が済み次第、直接ダレス国際空港へと向かっていただくこととなります。詳しくは、こちらの書類をご覧ください」

男性から手渡されたボードを開いて書類に目を通し、マリーンは首を傾げる。

「急ぐために民間空港を使用するのはわかりますが、乗り継ぎの待ち時間を考慮すれば軍基地経由でも充分だと思えますけど」

民間空港を軍が使用することは少なくともはいえ、軍人だといっただけで白い目を向けられる。おまけに、今は静止衛星軌道十六番

地の件で緊張が高まっている時期。民間施設の使用は極力避けた方が良いのではないかとマリーンは言ったのだが、返事は男性ではなく新たに現れた人物によってもたらされた。

「二度も乗り継ぐなど面倒だからね」

尊大な口調で言つてのけたのは、軍人であることを榮譽と偉ぶつて憚らず、軍の持つ強大な権力を自分のものと錯覚している、最悪の部類に入る人間であつた。

「——パウエル中佐」

今回の任務の指揮をとる人物だ。マリーンに書類を手渡した基地職員は素早く敬礼をして立ち去つた。男性の遠ざかる背中を少し羨ましげに見送りながら、マリーンは形ばかりの敬礼をしつつ口を開く。

「中佐はどうしてこちらに」

「欧州の方で任務についていたんだが、立場上すぐには離れられなかつたのだよ」

はたして、それが真実なのかはわからないが、マリーンにとって是不幸極まりなかつた。この状況では逃げようもなく、二人揃つて本部に出向かなければならないからだ。

中佐はマリーンの側まで歩み寄ると、彼女を舐めるような目つきで見やり、口元に薄笑いを浮かべた。

そのいやらしい視線に虫酸を覚えながらも、マリーンは決して面には出さず、この男もかと内心ウンザリする。

彼女の生家が爵位をもつ名家であることに加え、実兄が将来を約束されている軍高官。その上、当人が才気豊かな美貌の持ち主とくれば、上を目指す軍の独身男で彼女に対して下心を持たない人間はまずいない。実際マリーンはこの手の輩と頻繁に出会い、本当に辟易していた。

「そういえば君は昔、国際大学コロニーに在学していたそうだね」
そんなマリーンの気持ちになどまるで気づかず、中佐が気安く話しかけてきた。それも、一番思い出したくないことを。

硬い表情でマリーンは答える。

「——特待生として一時おりましたが、正規の大学生となる前に士官学校の方へ編入いたしました」

国際大学コロニー開校第一期生とともに、特待生として十三歳で奇跡の船に上がった。それから四年間、もう一人の特待生であつた彼と一緒に高季教授の元で学んだのだ。

六歳年下の高季彬と。

マリーンは脳裏に蘇ろうとする記憶を打ち消すべく、面を上げてきつぱりと言い放つ。

「ですが、そのことが今回の任務に有利になるとはお考えにならない方がよろしいかと。当時の関係者や同期の学生はほとんどおりませんし、いればいたで事情は複雑になります。小官は軍を選んだ……裏切り者ですから」

そう言つて口を閉ざすとマリーンは視線を足元に落とした。予想もしなかつた彼女の気迫に、中佐は少し驚きながらも軽く笑つてみせる。

裏切り者という言葉に秘められた、彼女の真意を完全に誤解して「そうか、君の選択は正しかったな。早々に、大学なんぞに見切りをつけて軍人になったのは。まあ、君も古巣に戻るのは抵抗があるかもしれないが、今回の任務では私の副官として同行してもらうだけ。全て私に任せておけば大丈夫だからね」

中佐はマリーンの肩を軽く叩いて、彼女に背を向けて歩き出した。出発の時刻まで、士官用のラウンジで時間を潰すつもりなのだろう。そんな無用な時間があるのなら、どうして民間空港の使用を避けようとしなのか。一国の国際空港において、本来利用すべき民間人を後回しにしてまで軍人という優越感に浸りたいのか。あんな奴が軍服を着てのさばっているから、軍部のイメージが悪くなる一方なのだ。

利己主義な形式だけに囚われている強大な組織——統合軍。

誰もいなくなつた待合室でマリーンは悔しそうに口元を歪め、握

った拳を窓ガラスに打ちつけた。

憤りが収まることはない。

結局、自分も組織を守る側の人間なのだという事を思い知らされて。

「どうせ兄様に会うことはできないのよね」

マリーンは小さな呟きを漏らして、深い溜息をついた。

兄であるウィンクラー少将は、今回の任務に直接関わってはいないし、そうでなくとも多忙な人間である。妹である彼女とて半年以上もの間、生身の姿を見ていない。

苦手な人間と一緒に敬遠すべき場所で、面倒な任務をこなす——そんな苦勞を強いられているのだ。根本的な要因である兄に愚痴でもこぼしてやりたいのだが、それも叶わない。願わくば交渉相手の如月博士が厄介な人物でなければいいと、マリーンは思った。

空の向こうから近づいてくる軍用機の機影を瞳に映し、マリーンは表情を引き締めるのであった。

『裏切り者!!』

そう叫んで走り去った背中を追うことはできなかった。

——兄との約束だった。

十七歳になるまでは、自由に勉学に励んでいても良い。そのかわり、時が来れば軍人として自分の手伝いをして欲しい、と。

だから、約束の日まで可能な限り勉強に明け暮れた。その甲斐あってか、マリーンは本校から奇跡の船に上がれる、唯一の特待生に選ばれることになった。

そして、彼女は出会う。

国際大学コロニーとして開校する以前から、コロニーで寂しそうに地球を眺めていたひとりの少年、高季彬に。

あれから六年、裏切り者の汚名は晴らせそうにない。

兄との約束に縛られている限りは。

第5話

「……え!？」

講義の終了を知らせるチャイムが鳴ったと同時にあった。葵の視界が闇に閉ざされたのは。

全員が機会を窺っていたのだろう、講義終了間近から殺気立っていた室内。

講義を受講していた遺伝子工学を専攻する学生にとって、狭間研究所の副所長である葵の存在は、最先端遺伝子研究の情報に触れる絶好の機会なのだ。

そして、その均衡がチャイムの音で破られた瞬間、怒濤のように学生たちが押し寄せ、葵の体はすっかり人の渦に飲み込まれてしまったのである。

ノート、メモ、辞書。その上、何を履き違えてか、色紙を手にした者までがいる始末。そんな学生たちが周りを取り囲み、葵は身動きすらできない状態であった。

そこへ救世主のごとく現れたのが、ハンドスピーカーを構えたアルフレッドである。

「はい、皆さん。離れて下さい」

容赦なく、最大音量でアルフレッドが叫ぶと、葵の周囲を埋め尽くしていた学生たちは耳を押さえ、悲鳴を上げて散っていった。続けて、アルフレッドがハンドスピーカーを下ろして宣言する。

「一ヶ月間、執行部が如月博士の案内役につきます。博士に専攻分野での質問は原則として禁止、研究チームへの勧誘も解禁指示あるまで全面的に禁止します」

途端に、至る所でブーイングの声が上がる。横暴だの、執行部が何様のつもりだのと、この時とばかりに言いたい放題の学生たち。しばらく黙って眺めていたアルフレッドは、やがて涼しい顔でスピーカーを構え直す。

「背負い投げ食らいたい方は、順次受け付けますが」
すると、急に静まり返る一同。

執行部歴の若さに加え、幼く見える顔立ちと小柄な身体から軽んじられることの多いアルフレッドだが、昨年のクリスマス会打ち上げで、酒を飲んで暴れていた猛者ども十数名をあっという間にねじ伏せた武勇伝は奇跡の船全体に広まったとみえて、最近は株も上がってきたようであった。

「如月博士、どうぞこちらへ……って？ 教授、何してるんですか」
いまだ身体を硬直させたままの葵に手を差し出そうとしたアルフレッドが、すぐ隣りにいた教授の姿に啞然となる。彼は先程まで教壇に立っていた教授その人であるが、メモ帳片手に恥ずかしそうに笑う姿は周囲の学生と大差がなかった。

「いやあ、博士の先月発表された論文について、ちょっとお尋ねしたいことがあってね」

「何がお尋ねしたいですか。博士の案内は本校からの指示ですからね。教授連も右に同じ、執行部の決定に従っていただきます」

アルフレッドは半ば呆れながらも厳しく釘を差して、皆の羨ましそうな顔を尻目に、人垣の中から葵を救い出した。そしてどうしようかと迷った末、まだ不満顔の一同を振り返り、さほど大きくない声で言う。

「……忠告しときますけど、ホスト最終週は執行部会長が出てきますから」

「高季彬だつて——！？」

異口同音の雄叫びが訝し、講義室に狂乱の渦が巻き起こる。全員が口々に信じられないだの、まずいことになっただの、千差万別の反応を見せるが、結局のところ彬が関わるとろくな目に遭わないという、通例に裏付けられた至極まともな反応なのである。しかし、これで執行部の通達が厳守されることは間違いない。

全員が残念そうな表情で解散するのを見届けて、アルフレッドは葵を廊下に連れ出した。

「すみません、博士。決して根が悪い奴らではないんですが、何と
いうか、本当に知識には貪欲な奴らでして。学生としては立派な心
掛けなんだろうが、限度を知らないというか……」

並んで歩きながら、アルフレッドが弁護する。弁護であるかどうかは甚だ怪しいものではあったが。

しかし、葵はアルフレッドの言葉に何の反応も示さず、口を堅く結んだまま歩いている。

アルフレッドは、葵の横顔を盗み見ながら密かに溜息を漏らした。アルフレッド自身、あまり多くの例を知るわけではないが、奇跡の船の特待生に選ばれる人物は優秀ではあるけれど、ひと癖もふた癖もある人間がほとんどらしい。そして葵も間違いなく、その一人であるのは確実のようであった。

奇跡の船に到着してから早三日。初めてとなった今日の遺伝子工学部受講以前に、日常の衣食住に関することから案内を始めていたアルフレッドだが、三日間同行してわかったことは、葵が望むべくして奇跡の船にやって来たわけではないということ。

喜怒哀楽が皆無に等しく、葵の方から何かを尋ねてきたことなど一度もない。

頑なに心を閉ざした、学生以上の社会的地位に在る少年。動揺を――感情を見せたのは彬のことをアクアの口から紹介された、あの一度きり。

一体、どういう経緯で葵が奇跡の船にやって来ることになったのか。本校の許可済みとはいえ、まだ成長過程にある子供を充分な訓練も行わず、いきなり宇宙に上げるなど普通ならば考えられないことだ。

裏事情があるのかもしれないと、そう直感したアルフレッドではあったが、残念ながらそれ以上深く考えることはできなかった。

「――何なんだ、これは!？」

なぜなら通りかかった中央公園広場で、乱闘騒ぎを目の当たりにしたからである。暴れているのはざっと数えただけでも四、五十人

はいるだろうか。

「アル、手伝ってくれ」

弱々しい声を耳にしてアルフレッドが視線を向けると、群衆の中央で少佐が手を振っていた。その姿は仲裁に入っているというよりも、なす術もなく立ち尽くしていると表現した方が正しいかもしれない。

アルフレッドは手にしていたハンドスピーカーを芝生の上に放り出すと、葵を振り返った。

「博士は危ないですから、ここにいて下さい」

わずかながらも葵が頷くのを確認してから、アルフレッドは少佐の元に走り出す。その途中で、白昼から乱闘を起こしている学生たちが機械工学科と宇宙航空工学科の生徒だと気づき、アルフレッドは事情を察する。

原因が、あの地震にあることを。

「まったく次から次へと面倒ばかりっ」

野次馬をかき分け暴れている彼らの傍までやってきたアルフレッドは、手を伸ばして暴れていた機械工学科の生徒の腕を掴むと、気合い一本の背負い投げで、文字通り場外へと放り出す。

そうして五分もしただろうか。その場に立っているのは執行部の人間、アルフレッドと少佐だけになった。

「――仕掛けたのは？」

さすがに息も上がったようで、アルフレッドが肩を激しく上下させながら少佐に尋ねると、彼はしばらく迷った末に答えた。

「宇宙航空、だな」

その言葉に反発したのは、名指しされた宇宙航空工学科の生徒だ。「ちよつと待て、原因は機工科だろ！」

「何だと、寝言は寝てから言え！」

打てば響くというのか、一瞬の間を置くこともなく、機械工学科の生徒が反論する。なるほど、乱闘騒ぎに発展するはずだ。

「結局悪いのは双方ってこと？」

「それが正解だと思うな」

ふたたび険悪な雰囲気が漂い始める中、ゲンナリと疲れた顔で、二人は肩を落とすのであった。

「……はあ……」

この重い溜息は葵である。

アルフレッドが事態の收拾に乗り出して、もう十五分が経過しただろうか。

遺伝子工学部では執行部に対して風当たりが強かったが、今回は双方学科に属する執行部役員が揃っているおかげで、とりあえず冷静な話し合いに持ち込めている様である。もっとも互いの主張譲らずという状況は、現在も変わらないようであるが。

取り残された葵は少し離れた場所でアルフレッドを待っていたが、進展しない事態にさすがに飽きてきたようだ。

広場の周りを囲むように植わっている樹木の幹に背を預けると、葵は人工的に作り出された青天を見上げて呟いた。

「不合理なことばかりに時間を費やして、宇宙にまで来て何をやってるのか」

それは、葵の油断だったのだろう。

「だからこそ学生なんですよ」

予期せぬ返事に半ば愕然とし、背後に広がる林を振り返った葵の視界の中に現れたのは、歩み寄る白衣を着た背の高い人物。

行方不明の常習犯、高季彬であった。

彬は葵の横に立つと、広場の状況を眺め見やって独りごちる。

「ま、確かにこれは不毛だな」

そうして葵を見下ろして少しだけ笑うと、彬は広場の中央に向かって颯爽と歩き出した。

「ご心配なく。すぐに終わらせますよ、如月博士」

顔を強張らせた葵にそう言い残して。

葵に向けた彬の微笑は先程の独り言に賛同を示すものであったが、葵にとって自分に同意されること、それは嫌悪以外の何物でもなかった。

ズキッ。

痛みに顔をしかめて、葵は胸を押さえた。思わず口に出してしまった心の内の言葉。

彬に知られた狼狽は、他の執行部役員のようにごまかしたり言い逃れできるとは、本能的にできないと悟っていた。

それゆえの動揺。

これが綻びの始まりであった。

第6話

乱闘の根本的な原因は当然のごとく例の地震であるが、事の発端はというと機械工学科と宇宙航空工学科の生徒が運悪く広場で鉢合わせしてしまったことであつた。

集会の準備が進められている広場の様子を見物しようとまずやってきたのが、現在執行部の厳命で作業停止を余儀なくされ、暇を持て余している機械工学科。三日前に問題を起こした張本人、新型口ケットブースター開発チームである。

文字通り、奇跡の船に衝撃が走るほどの問題事件を起こした彼らであるが、その顔に反省の色はまったく見られない。彼らにしてみれば世紀の大発明となる、完成した新型ブースターの成果に酔い痴れて、そもそも罪悪感など存在しなかったのだ。

というわけで罪の意識のかけらもなく、楽しそうに見物を決め込む機械工学科。そんな無邪気な姿が、たとえ遠目でも宇宙航空工学科の生徒にわからないはずがなかった。同学部の上に、学科も隣り合わせなのだから。

昨日の学友は今日の敵。

こちらは苦心して作成したデータを一瞬の停電でぶっ飛ばされて、あまりのショックで気力が失われたせい、三日が経過しても復帰作業は遅々として進まない。にも関わらず停電を起こした極悪人どもときたら、反省はおろか、物見遊山にくり出しているときた。これで腹が立たないわけがない。

売られた喧嘩、買わずしてどうする。

こうして大乱闘へと発展したのである。

執行部の厳命は謹慎の意も含んでいたのだが、今さらそれを指摘しても致し方ない。

とりあえずは事態を收拾しなくてはと、少佐が口を開いた。

「まあ、問題を起こしたんだから自重すべきだったな」

そんな月並みな台詞でまとめようとしたが、すぐに機械工学科からクレームがつく。

「何だよ、それは。少佐は宇宙航空^{あうち}の肩を持つのかよ！」
アルフレッドはアルフレッドで、

「腹が立つ気持ちはわかるけど、どうして何も言わずに殴りかかるんだよ」

とたしなめれば、

「アルフレッドは頭にこないのかよ、二ヶ月間の血と汗と涙の結晶を無駄にされて！」

と返される。

執行部役員でもあり、両当事者の側にそれぞれ属する少佐とアルフレッドの身としては、かなり複雑な気持ちだ。

もう少し冷静になれ、と本当は言いたいところなのだが、口に出したが最後、火に油を注ぐ結果となるのは明白である。

「あのお、早く終わらせてもらえませんか」

挙句、集会の準備係が小声で二人に訴えてくる始末。学部間及び学科間の紛争には責任をもって対処するという執行部の職掌がなければ、とうに匙を投げてしまいたい気分である。

「そんなに後生大事なデータなら、バックアップくらい用意しとけよ！」

「バックアップまでおしゃ力にした馬鹿はお前らだろっ！」

「馬鹿だって？ こっちは新型ロケットブースターを開発した、機械工学科だぞ」

「そのブースターを搭載したシャトルを飛ばしてるのは、俺たち宇宙航空工学科だ！」

執行部の手前、乱闘にこそならないが、言葉の応酬は止まるところを知らず。アルフレッドと少佐は同時に溜息をつく。

「馬鹿に説明しても無駄だろうが、あの新型ブースターは奇跡の船を動かせるかもしれないんだぞ」

「だから馬鹿はそっちだろ。動かせるかもって何だ、コロニーの質

量を考えてから言え」

集会準備係の哀願もある。ここは学部に一旦引き上げて話し合いの場を設定すべきだろうかと、二人が顔を見合わせ考えた。

——その時だった。

「それが、一概に不可能でもないんだよ」

機械工学科と宇宙航空工学科、永遠に続くかと思われた言い争いに、涼しげな第三者の声が割り込んだのは。

野次馬の中から姿を現わしたのは、白衣姿の執行部会長高季彬である。

途端に言葉を失う当事者の生徒たち。遺伝子工学部に限らず、全ての学部に浸透する執行部会長の威厳は大したものであった。

「最近よく会うな」

感心したように少佐が感想を述べたのに対して、アルフレッドは彬の台詞に敏感に反応する。

「おい。不可能じゃないって、まさか……」

信じられないといった表情のアルフレッドに、彬は涼しげな口調そのまま、とんでもないことをさらりと言つてのける。

「機械工学科ご自慢の新型ブースターには脱帽するよ。微々たるものにしろ、この巨大質量のコロニーを動かしたんだからな」

その台詞に歓声を上げた機械工学科の生徒。

だが、彬の視線は当然ながら冷やかだ。

「まったく——事の重大さがわからない奴らだな。洒落ですむ程度だから笑っていられるけど、管理部はこの三日間非常警戒態勢^{エマージェンシー}、徹夜で状況分析にあたってたんだぞ」

管理部とは奇跡の船を根底で支える、最高の宇宙技術者集団のこと。

正式名称は宇宙開発技術局国際大学コロニー施設管理部。二十四時間体制でコロニーの施設管理を統括している、国際大学とはまったく無関係の国際公務員の方々である。

あらゆる非常事態でも的確に対処できるよう厳しい訓練を受けた

彼らをして、今回の事件は想定外、冷静ではいられなかったらしい。そのため、事後処理に非常勤も動員して、不眠不休であたっていた管理部。

無論、彬も駆り出されていた一人で、少しは管理部の苦労も考えろと愚痴も含めて言ってやったのだが、機械工学科の生徒たちはキヨトンとして惚けたままで、彬は呆れて掌で額を押さえるしかなかった。

専門分野のエキスパートを育成する、国際大学の教育方針が招いた弊害か。機械工学科の生徒たちには、この大質量コロニーが厳密に計算し尽くされた座標と速度で静止衛星軌道上に在ること——わずかな座標のズレが及ぼす危険性がわからないのだ。

それとは対照的に、専門分野で事の重大さを何より熟知している宇宙航空工学科の生徒は、アルフレッドも含めて顔面蒼白、恐怖で顔を引きつらせていた。

「彬。機工科（きこうか）に説明するのは俺たちですから、お前は話を先に進めろ」

少佐が気を使って間に入るが、彬は軽く頭を振って告げる。

「話を先に進めると言われても、機工科にはやってもらう仕事があるんでね。まあ、仕事ってより……罰ゲームかな」

そうして機械工学科をちらりと見やり、彬は不敵な微笑を浮かべた。

意味深げな執行部会長の笑みを見て、表情を凍りつかせる機械工学科の生徒たち。

会長直々のお出ましに加え、罰ゲームと笑顔で告げられたとなれば、極めて悲惨な状況に追い込まれるのは想像に難くない。

固唾を呑んで見守る彼らを前に、満足そうに頷くと彬は言う。

「機械工学科が開発した新型ロケットブースターは、現物並びに設計図、特許権に至るまで、本日この時間をもって宇宙開発技術局が差し押さえる」

一瞬の沈黙の後、機械工学科の生徒たちは一斉に反発した。

「横暴だぞ！　いくら管理部の決定だったって、そんなの聞けるかつ。第一あれは援助を外部に受けてるんだ。役所の命令なんか、クソくらえだ！」

無理もない。自分たちの力で作り上げた苦心の発明品を、問答無用とばかりに奪われるのだから。

「ど阿呆あほうつ。管理部じゃない、宇宙開発技術局だ！」

彬にしては珍しく一喝して彼らを黙らせると、咳払いをして言葉を続ける。

「今回の国際大学コロニーの不始末で宇宙開発技術局と本校が話し合った結果、現在コロニーに搭載されている軌道修正用のブースターを、問題の新型ブースターに全て置き換えることになった。何でも、ちようど耐久年数が来年切れることになって、技術局が発注をかけようと思っていたところらしい」

「……おい、彬。まさか罰ゲームって」

少佐の苦い顔を振り返り、彬は肩を竦めてみせた。

「機械工学科総出で全部作ってもらう。ああ、資材なら心配ないかな。午後一時の便で届くから。全部で二十七機。期限は、当然ながら軌道の修正が行われる予定日前——お楽しみの抗議集会までとしておこうか」

「なに——っ!？」

機械工学科の雄叫びを耳にして、彬は満足げに笑うと、手にしたファイルから次から次へと用紙を取り出して少佐に手渡す。

「これが正式な宇宙開発技術局からの要請書に、こっちが本校から同旨の命令文。あと宇宙開発技術局と管理部と本校と工学部総監などに提出する、計三十二枚の始末書と顛末書。それと、これには反省文も添付した方が身のためだつて学長からのアドバイス。民間会社には契約破棄にもなつて、賠償その他含めて本校の法学部が交渉にあたる。それに関する要請書、あと資材の受領書も忘れないように」

「彬、説明はいいから」

少佐が吐息を漏らして、彬からファイルごと書類の束を受け取った。特待生とはいえ、仮にも自らが籍をおく学科での不始末だ。少佐は万事諦めた様子で、愛すべき機械工学科の生徒たちを振り返って声もなく笑う。

「よかつたな、謹慎命令は解除だ。まさか俺をここまで巻き込んでおいて、この決定に意義のある奴はいないよな」

沈黙。そして、それが答えである。

彬は健闘を祈るとばかり少佐の肩を叩いて、アルフレッドと宇宙航空工学科に向き直る。

「宇宙航空も手伝ってやってくれ。アルフレッドは如月博士のホストも含めて、二週間を少佐と二人で調整しあつてな」

「ちょ……ちょっと待て、宇宙航空は手伝える状況じゃないって」

例の一件で失われてしまったシャトルの来期航法データの再入力作業で、とても人手を割く余裕はないと訴えたのだが、さすが執行部会長やることにそつがない。

「ああ。その件については、シャトルを運行させてる航空協会と宇宙開発技術局で、バックアップ体制を取らせるよう手配済みだ。管理部の軌道確認で遅くなったけど、すでに地上と端末の連結は完了してるから」

あつさりと言つてのける彬の台詞を、茫然と聞く宇宙航空工学科の生徒たち。

それはそうだろう。簡単に復帰できないからこそ、隣の学科と乱闘騒ぎまで起こしたのだから。

「……地上はどれくらい？」

「交替要員含めて、二千人体制」

聞いた途端、アルフレッドは拳を震わせながら言う。

「頼むから、そういう話は早めに教えてくれ」

彬は人の悪い笑みを閃かす。

「だから、管理部の軌道確認に時間を取られたって言ってるだろう。そんなことより、如月博士を放ったままじゃまずいんじゃないか」

彬に言われ、すっかり忘れていたと、アルフレッドは顔を青ざめさせた。

その彬はというと用は済んだとばかりに、さっさと二人に背を向けて足早にその場を立ち去ろうとする。

「おい、彬。昼飯、一緒にどうだ？」

背に向かって声をかけた少佐だったが、返る答えは素っ気ないものであった。

「まだやることがあるから遠慮しとく」

振り返ろうともせず、彬は軽く片手を振って答えるだけだった。遠ざかるその背中を見送りながら、少佐が深々と嘆息する。

「まったく、何の仕事を抱えてるんだか。とりあえず、博士と昼飯でも食いに行こうか、アル」

彬の登場ですっかり毒気を抜かれ、おとなしくなった工学部の生徒たちが野次馬とともに散ってゆく中、少佐はアルフレッドに声をかけたのだが、返事は彼ではなく少佐の腰元から返ってきた。

「私は結構です」

忘れ去られていた如月博士その人である。葵は堅い口調で先を続ける。

「三日間の案内で日常生活の大半のことはわかりました。もう付き添いの必要ありませんので失礼します」

それだけ言う口を真一文字に結んで、彬と同様、さっさと歩き始めた。

それに慌てたのがアルフレッドである。

「ちよつと待って下さい、博士。さっきの講義終了後の有様を忘れましたか。執行部の保護なしでは危険ですって」

しかし、葵はアルフレッドを振り返ると、眉一筋動かすことなく応じる。

「私には遺伝子研究分野において、どんな質問にも答える義務があります。そして、そのための知識も持っている。ですから執行部の保護など unnecessary です」

狭間研究所副所長の責務だときっぱり言い切った葵に、アルフレッドは引き止めるべき言葉を見出だせなかった。

葵が背を向ける。

「難攻不落だな」

広場から立ち去る葵を眺めながら、少佐がしみじみ漏らした言葉に、アルフレッドは肩を落として小さく頷く。

「奇跡の船では博士も一人の学生だって言いたかったんですけど、何だかまずいような気がして……」

——言えなかった。

「仕方ないだろう。博士の態度が軟化しない限りは傍に寄らない方が賢明だ。少し距離をおいて見守るしかない」

意気消沈するアルフレッドの肩を叩いて、少佐は努めて明るい声で言った。

こっちはこっちで仕事もあるしと、少佐が彬から手渡された書類の束を掲げてみせる。

少しだけ気が楽になってか、アルフレッドが苦笑いを浮かべた時だった。周囲にいた学生たちが、今の葵とアルフレッドのやり取りを見て感想を漏らす。

「あれが、遺伝子の奴らが狂喜乱舞しながら待ってた天才児かよ。

何か、性格可愛くないなあ」

「子供が虚勢張ったって、無理があるのに」

まったくだと揃って頷く学生たち。

——虚勢を張り続けるには無理がある。

第三者である彼らの言葉を、少佐とアルフレッドが苦い気持ちで思い出すことになるのは、もう少し後のことであった。

第7話

「新緑が鮮やかでとても綺麗だね」

狭間研究所敷地内、創始者の道楽で植えられた数十本の桜。春に花を咲かせた桜は今、瑞々しい葉の緑に彩られていた。

あれは、高季教授が狭間研究所に新任の所長として着任した頃――
――昨年の初夏だった。

外の景色などにはまるで興味がなかったせいで、教授の第一声に何と答えればいいのか、返答にとても窮した記憶が葵にはある。

国際大学で教鞭をとる傍ら、狭間研究所創設当時より優秀な同研究所スタッフとしても名を連ねていた高季教授。国際大学コロニー学長就任と同時に正規スタッフの名簿から抹消されたものの、所長選定時には常に最有力候補として名が上がっていた。

彼はその年ようやく長い教師人生にピリオドを打ち、新所長として狭間研究所にやって来たのであった。

――息苦しい。

胸の中心には、絶えず鈍い痛み。

痛い、苦しい、辛い。

だが、その思いを伝えるべき人はいなかった。生まれた時からずっと。

他人の介在がなければ誕生しなかった命。

命の存在価値を、自らに架さなければ生きてはいけなかった。造りモノの命と身体。しかし、心は造られたものではなく、ゆえに封じた。深く――とても深く。

望まず与えられた命、その価値は。

望まず与えられた心、その意味は。

答えは、誰によってもたらされるのだろうか。

覚醒は最悪だった。

状態も、状況も。

瞼を開くと、柔らかな白い光が視界に入ってくる。ゆっくりと上体を起こした葵が周囲を見回すと、そこは白い殺風景な部屋のベッドの上だった。

なぜこんな場所に自分が寝かされているのか、謎はすぐに判明する。

「気がつかれました？」

暖かな雰囲気を感じ、部屋の奥から姿を現わしたのはアクアである。白衣の胸につけられたプレートは医学博士の証、正式な医師免許を取得している証拠だ。

そのプレートを見る葵の視線に気づいたのか、アクアは柔らかな微笑みを浮かべる。

「奇跡の船の医学部院生なら誰もが持っていますわ。十番地にある宇宙医療センターの医師も兼任してるため、医学部内ではプレート表示を義務付けられているんです」

静止衛星軌道十番地とは、葵が奇跡の船に来る際に経由してきた宇宙施設、宇宙医療センターのことだ。簡単にいえば、宇宙空間に浮かんだ病院である。

ならば、アクアの姿と説明から察するに、葵の今いる場所は、医学部付属病院であるということか。

「私は……倒れたんですか？」

消え入るような細かい声で尋ねながら、自らの記憶を辿るが、実験室で植物遺伝子組み換え作業に立ち会っていたところまでしかない。

アクアは、葵が寝ているベッドの横に備え付けられた椅子に浅く腰かけた。

「ええ、遺伝子工学部の研究実験室で。遺伝子工学部と医学部は相互間交流が多いので、直通の通路で結ばれているんです。口止めもしておきましたし、博士が倒れられたことを知っているのは、一部

のごく限られた人間だけですわ」

アクアの気配りは、葵にとってありがたい話である。しかし、逆にいえば、どうしてアクアがそのことを知っているのかという疑問が新たに浮かび上がる。

葵が他人を避けているということ。

アクアは人差し指を唇に当てると、申しわけなさそうに頭を傾けてみせる。

「ごめんなさい。あの時は言えなかったけれど、実は本校とは別に高季教授からも博士のことを頼まれていたんです」

内々に高季教授から頼まれていた。

アクアの口から聞いた二度目の名前だが、不思議と今回は驚きも嫌悪感も湧かない。おそらく、他人の言葉に反応できる気力すらないからだろうと、葵はひどく冷静に自分を分析する。

「……身体の様子を？」

「具合がかなり悪そうだったから、体調面には特に注意して欲しいと」

アクアの告白に葵は頭を垂れ、シーツを掴んだ手に力を込める。

そんな葵をじつと見つめていたアクアは、小さく吐息をついて口を開いた。

「神経性胃潰瘍ですから、安静にしていれば数日で回復します。もっとも——根本的に治すためには、ストレスを生じさせる原因を取り除かねばならないのですが」

アクアの言葉に、葵は目を瞬く。

（ストレスからくる神経性胃潰瘍？ この胸の痛みが——？）

そう思った刹那、襲ってきたのは激しい痛み。

苦しそうに胸を押さえて上体を屈めた葵に、なぜかアクアは手を差し延べようとはせず、冷たく感じられるほど静かな声で告げる。

「薬は効いているはずなんです。それでも感じる痛みは博士ご自身が望んだということ。これ以上の投薬はできませんし、医師としては面会謝絶の上、絶対安静という判断しか下せません。あとで病棟

の方へご案内しますから、少し横になつて下して下さい」

言い終えてアクアは立ち上がり、一礼を残して部屋の外に姿を消した。

顔をしかめつつ、アクアの後ろ姿を見送った葵は、扉が閉ざされた後で、ベッドに倒れ込むようにしてその身を横たえた。

正直、冗談ではないと思う。不様に倒れた拳句、病室に縛りつけられるなど。

だが、地上の研究所にいた頃のように、虚勢を張れるだけの体力と気力はすでに失われている。限界を超えたゆえの結果なのだから揺らぐ視界。

白い天井を恨めしく思いながら、葵は静かに瞼を閉じる。

『己を痛めつけても、何も変わりはないよ』

高季教授の口からそんな台詞を聞いたのは、教授を避け始めた頃だったか。

『自分を痛めつける趣味などありません』

素っ気ない口調で答えたのは間違いなく自分だが、今はもう同じ答えを返せやしない。

——博士の望んだことです。

同じ言葉に対して、何一つ反論できなかった自分には。

「博士が倒れた!？」

思わず、アルフレッドは叫んでいた。

大きな声を出すなど言ったのに、と頭を抱える少佐。

いけないとばかりに、アルフレッドは両手で口を塞いで辺りを見回し、今度は小声で少佐の言葉を繰り返した。

「倒れたって、本当ですか」

「一応、今日は俺のホスト最終日だったからな。それで今朝、アクアが機械工学科まで来てくれて、極秘情報と教えてくれたんだが…」

そこまで言って、少佐は顔をしかめた。

「二日前の講義のあと、顔色が冴えないとは思ったんだ。だが、すぐに研究室のほうに移動したんでよく確かめなかったんだ」

悔しげな少佐の声に、アルフレッドも同じく沈痛な面持ちで言う。
「少佐のミスじゃありませんよ。元はと言えば、僕が悪いんですから」

ホスト三日目にして不興を買った自分が。

そう言って謝るアルフレッドに対し、少佐は、お前のせいじゃないと言おうとして思いとどまる。どちらにしろ、執行部のミスには違いないのだから。

二人は同時に溜息をついて天を仰いだ。

そんな彼らの後方では、二人の心情を窺う様子もなく、派手な音を打ち鳴らし、機工科の生徒が総出で新型ブースターの制作に勤んでいる。

工期短縮の名目で、本校に降りていた生徒にも招集がかけられた機械工学科。抗議集会の参加という特典もあり、奇跡の船に在席している全ての生徒が、ここ機械工学科の制作工場に集合しているのであつた。

おかげで驚異的なスピードで作業が進められ、基礎組み立ては全機終了。そして、完成したブースターから順に管理部と宇宙航空工学科の誘導で、策定されたブースター取り付け箇所に手際良く設置されていた。

しかし、期限を切られているとはいえ、何が彼らをそこまで駆り立てるのか。

実をいうと、ブースター制作の話の後に付け加えられた事があつた。

期限に間に合わなければ、後期の予算を凍結すると脅されたのである。これで、機工科が必死にならないはずがなかった。

「少佐ーあ、ここの接合面見てもえませんかー」

呼ばれた声に振り返ると、バーナーを握ったままの生徒が手を振っている。危ないこと極まりない。少佐は、手にしたメガホンを口

に当てると大声で怒鳴る。

「こらっ、すぐ行くから手を振るな！」

「はぁーい」

と答えて皆が一斉に手を振る。人の話をまるで聞く気のない、愛しい同学科生である。放っておくと何をしでかすかわからないのは、地震の一件で証明済み。少佐はアルフレッドに肩を竦めてみせた。

「博士の件は、アクアが何とかしてくれる。——どのみち、俺たちはお役御免だけだな」

その言葉にアルフレッドが頷くのを見て、少佐は片手を挙げ、ふたたび収拾のつかない作業場に舞い戻って行った。その様は、特待生というよりも現場監督。あるいは、悪ガキ集団を引率する保父さんのようであった。

苦笑いを浮かべて少佐の背中を見送るアルフレッドは、ふいに真顔に戻ると低い声で呟く。

「だけど……博士の倒れた原因が慣れない環境からくる過労だとしても、やっぱり、謎は深まるばかりだよな」

浮かぶ疑問は、葵が本当は望んでいないにも関わらず奇跡の船に來なくてはならなかった理由。そして葵を特待生として、正規の手続きも踏まずに、異例の早さで宇宙に上げた本校の真意だ。

「もう一幕あるかな、近いうちに」

博士が倒れただけで終わると思えない。

それに、ホスト最終週には彬が控えている。脳裏を掠める不安、危機感を孕んだ予感。

予感が予感のまま終わることをアルフレッドは祈るのであった。

第8話

——胸に石を抱えたように重苦しい気分。身体の変調は著しく、日を追うごとに倦怠感が増してゆく。

副所長の地位にあつた葵は、所長選定に関する人事に介入できる権利も有していたが、どうせ誰が所長になろうと知ったことではないと、最初から権利を放棄していた。

だが仕事に支障を来し始めるほどに、深刻な身体の異常。

もしも、あの時こうなることを知っていたれば、きっかけであるところの高季教授を排除するため、自分は副所長としての人事権を發動したであろうか。

——否である。

『先進科学の分野において、遺伝子研究には様々な制約が国際法によつて義務付けられています。種の根源を揺るがす危険性を孕んでいることを考えれば、倫理面からも国際法の処遇は当然のことでしょう。しかし、決して国際法は研究を縛りつけているわけではありません。むしろ法は研究者の、人の良心を守るために存在しているのです。確かなものは、純粹に科学を探求する研究者と、それによつて実りを生んだ結果。制約のなかった過去、先人の歩んだ道を追うのではなく、自分の求める夢を実現させる道を作つて下さい。それが、遺伝子工学分野で最先端研究を職務とする狭間研究所、その所員である皆さんに求められる唯一の義務であり、私の願いです』

所長就任の式典席上でのスピーチは、葵を愕然とさせるに充分であつた。

過去と現在、そして未来。

確固たるビジョンを持った高季教授。

自分の浅はかさを、はつきりと思い知らされた。自身の目的を果たすための手段として、遺伝子研究者という生き方を選んだにすぎない葵には。

自分と教授との差は、年や実績、知名度ではなかった。それは、生き方に誠実であろうとする心だ。

埋められない溝、遠い背中。

自覚したからこそ、一緒にいることが辛くなり逃げ出したのだ。

大きな窓ガラスの向こうに広がるのは、安らぎの園と称される、医学部ご自慢の植物庭園であった。

温度湿度が一定に保たれた空間には、数多くの植物が咲き乱れ、地上から寄贈された色鮮やかな鳥たちが、吹き抜けにそびえる大木の枝で羽根を休めている。

葵が医務室から一般病棟の一室に移って、四日が経過した。最初はひたすら激痛をやり過ごすだけの日々であったが、現在は容体もかなり落ち着いて、窓の外に広がる緑を觀賞できるまでに回復していた。

それを可能としたのは、外界より隔たれた静寂に満ちた空間と時間。そして、何よりアクアの献身的な看病があつてこそだろう。

「失礼します。検温は済みましたか」

柔らかな声とともにスライドした扉から姿を現したのは、白衣姿のアクアである。

ベッドの側に歩み寄った彼女に、葵は耳に付けていた小型検査器を手渡す。メモリー表示された体温や心拍数などの結果に目を通したアクアは、葵に晴れやかな笑顔を向ける。

「もう大丈夫ですね。午前中の胃力メラの結果も良好でしたし、面会謝絶は解きましょう。病院内なら外出して頂いても結構ですわ」

そんなアクアの言葉に、葵は控えめな微笑を浮かべると、折り目正しく礼を述べる。

「ありがとうございます」

アクアは、高季教授に頼まれていたことを話して以来、特に何も言わないが、おそらく最初に告白した以上に高季教授と何らかの秘めごとを共有しているのだろう。

それでも葵にとって、彼女本来の優しく朗らかな雰囲気と、医師としての判断を誤ることのない厳しさを合わせ持ったアクアの存在は、生まれて初めて素直に接することのできる、信頼に値する人物と成り得たのである。

口から自然に滑り出た感謝の言葉。

しかし、葵の透き通るような微笑はすぐにかき消されてしまう。

「ですが、面会謝絶など解いたところで誰かが来るわけでもないし、別に今のままで結構です」

子供だと嘲ることもなく、博士号を持つ特待生として、誠意をもつて接してくれた執行部の少佐とアルフレッド。そして、遺伝子工学部の生徒たち。

なのに、彼らの好意を無下に切り捨ててきた。

そんな自分の元に訪れる者などいるはずがないと、堅い表情で葵が口にした台詞にアクアは微笑んでみせる。

「そんなことはありませんわ、博士」

悪戯っぽく片目を閉じてみせたアクアに対し、葵が怪訝そうな表情を浮かべた瞬間だった。アクアが持つ扉の開閉リモコンによって開け放たれた扉から、怒濤のごとく人が溢れ出てきたのは。

葵が横になっっているベッドを取り囲むようにして、あつという間に病室を埋め尽くしたのは、葵の見知った遺伝子工学部の学生たちであった。

驚きのあまり目を点にして硬直する葵に、遺伝子工学部の女性陣によつて、次々と花束が差し出される。その花束の方が大きくて、花に埋もれてしまう葵。

周りを囲んだ花をしばらく呆然と見つめ、ようやく学生たちが見舞いにやって来たことを悟った時だった。

「ごめんなさい！」

突然のことに目を丸くする葵の前で、学生たちは頭を下げた言葉を続けた。

「宇宙に上がったばかりの博士の体調も考えず、自分たちの都合で

博士を引っ張り回したりして」

全員が口を揃えて謝る。言葉が、一言一句誤ることなく完全に同調していたところを見ると、ここに来る前に全員で練習してきたのであろう。

「これからはスケジュール管理を徹底して、二度とこんなことの起こらないようにしますから。……お願いしますう、見捨てないで下さあい」

手を揉み絞り、瞳を潤ませて訴える学生たちに、葵は複雑な表情を向けて小さな声で答える。

「あの……私が倒れたのは自分の不徳ですから、あなた方が気に病むことはありません」

自分の不徳——まったくその通りだと、葵は思った。

神経性胃潰瘍を招いたストレスの原因は、他人から与えられたものではなく、自分自身が生んだもの。己を痛めつけていると言った、高季教授の指摘そのままに。

そして、それを素直に認めることができたのは、宇宙に浮かぶ学び舎で純粹さを守り続けることができる、奇跡の船の学生たちのおかげではないかと思う。

たとえ、自分が奇跡の船に在るべき人間ではないにしてもだ。

ふと辛そうな表情を見せた葵に、一人の女生徒が堪らず声を上げた。

「気にするなって言われても、余計気になりますよ。だって——博士は、あたしたちの仲間なんですからね」

「そうそう、遺伝子^{うち}だけだったんですよ。創立以来、一度も特待生を迎えたことのない学部って。だから遺伝子工学部特待生第一号が高名な如月博士だと知って、喜び勇んで各学部中にふれまわったくらいで」

女生徒に相槌を打った男子生徒の言葉に、全員が自慢げに大きく頷いてみせる。

「とにかく、博士は『早く元気になるから』って、ただ笑って下さ

ればいいんです。そしたら私たちも安心するし、博士も元気になる。これでめでたしめでたし」

明るい口調で別の女生徒が言うと、さらに隣の男子生徒が頭を小突いて言い加える。

「昔話じゃないんだ、馬鹿。——とにかく、博士は何も心配いりませんから、ゆつくりと治療にだけ専念して下さい。アクア女史の極秘命令は死守してますから」

「あ、俺たち影武者やってます！」

そう言って数人の生徒が挙手する。影武者とはつまり代返のことである。

自分が倒れたということを秘密にするために彼らが手を尽くしてくれていると知って、葵は素直に感謝の言葉を口にした。

「ありがとうございます」

笑顔とまではいかないが、それでも初めて覗かせた和らいだ表情に、皆は嬉しそうに顔を綻ばせて口を揃えて答える。

「どういたしまして」

「はい、面会はこれまで。遺伝子工学部の方々は学部に戻りなさいね」

頃合いを見計らって、アクアが手を叩いて皆を病室の外に出るように促す。

遺伝子工学部の生徒たちは、渋々病室を後にした。去り際に、ベツトの葵に手を振ることも忘れず。

「……見捨てないでって、まるで新婚家庭だわ。まあ、博士が遺伝子工学部に嫁入りしたと思えば入るせいでしょうけどね」

嵐が去り静寂を取り戻した病室で、アクアが飽きれ顔でしれっと言っただけ。

「嫁入り……」

唖然となる葵だが、アクアはそんなことなどお構いなしで、白衣のポケットから取り出した物を葵に手渡した。

それは一枚のカード。

特待生に内定してすぐ宇宙に上がった葵は、本来手続きのため出向かなければならない本校に、一度も足を運んだことがなかった。そのため、奇跡の船の住人と認められた資格たる、施設の使用や身分証明などを兼ねたＩＤカードをまだ貰ってはいなかったのだ。

「少佐とアルフレッドが、不便だろうと本校に申請して、奇跡の船に戻ってくる機械工学科の生徒に持ってきてもらったそうですよ。見舞いには忙しくて来れないので、私が預かったんです」

葵はしばらく手の中のカードを食い入るように見つめていたが、ふいに面を上げると震えた声で言う。

「どうして私に良くして下さるんですか。そんな価値なんてないのに……」

遺伝子工学部の生徒たち。執行部の二人に、そしてアクアもだ。
——こんな自分にどうして。

切実な瞳で訴える葵を、アクアは真摯な面持ちで黙って見ていた。そうして静かに口を開く。

「博士が何を根拠に、ご自身に対して価値がないとおっしゃっているのかは存じません。ですが、そんな風に自分を貶めることは、博士を受け入れた学生たちをも貶めているではありませんか？」

アクアは目を伏せると、会釈して病室を後にした。
自分と一緒に皆をも貶める——。

誰もいなくなった部屋の中で、葵は唇を噛んでカードを握る手に力を込めた。

ふたたび訪れた静寂、寂しい空間。

葵は、生まれて初めて泣きたくなる気持ちを覚えた。

逃げ場を選んだだけだったのに……。
涙は出なかったけれど。

予定通りならば、本校への国際大学コロニー立ち入り許可申請と同時に、マーシャル宇宙センターから直接コロニーに乗り込むはずだった。

二週間も前に。

それが予定の変更ではなく、ただ単に宇宙センターに足留めされている現状の理由は、何らかの原因で軌道が狂ってしまった国際大学コロニー、その座標修正計算に手間取っているからである。

ゆえに凍結された任務。

マリーンは無駄だと思いつつも、管制室に日参していた。もちろん、本部からの凍結解除の知らせをいち早く知るためである。

宇宙に飛び立つシャトル、そして宇宙から帰還するシャトル。双方の誘導に忙しく、ごった返している管制室。マリーンは邪魔にならないよう、窓際で両腕を組みながら柱に背を預けている。

国際大学コロニーに如月博士が特待生として到着し、三週間で数えた。時間が経過すればするほど、任務の成功確率は下降線を辿る一方。しかし、気は急いても、座標がなくなればシャトルは飛ばせない。マリーンは大きな溜息をつく。

民間会社の定期便シャトルは、すでに奇跡の船への運行を再開している。にも関わらず、軍は現在も小型シャトル一機飛ばすことすら叶わない。その原因は人的要素ではなく、情報処理システムの違いによるものだ。

しょせん、世紀の大発明と称されるニューロン・ネットワークシステムには太刀打ちできないということ。そして、奇跡の船に高季彬が在る限り、この分野における軍の技術遅れは深刻なのだ。

「それにしても……」

思わず口から言葉が漏れてしまうほど、ここ数日彼女を悩ませていたのが、今回の任務の責任者たるパウエル中佐である。

座標計算が終了し次第すぐ宇宙に飛び立つことになるため、宇宙センターで待機していなければならないのだが、パウエル中佐には当初から任務に対しての使命感というものが欠落していた。彼は本部に催促することもせず、宇宙センターから数キロ離れた場所に建つ軍高官用のホテルで、同じ派閥の部下らとバカンスに興じているのだから。

情けないことである。

マリーンは軽く頭を振って、少し外の空気でも吸いに行こうかと身を起こしたところ、通信士の鋭い声が彼女を呼び止めた。

「ウインクラー大尉、本部より入電。座標修正完了につき、凍結命令解除だそうです！」

マリーンは身を翻し、コンソールへと駆け寄った。画面に映し出された命令文に素早く目を通し、彼女は隣の通信士に耳打ちする。

「パウエル中佐に連絡を」

そして面を上げると、静まった管制室内に響き渡る声で告げた。

「国際大学コロニーへのシャトル打ち上げが最優先となります。発進予定のシャトル全機は現状のまま待機、到着便についても可能な限り上空での旋回を」

的確なマリーンの指示に従って、管制室全体が動き出そうとした。しかし次の瞬間、通信士の切実な声でそれは静止する。

「駄目です、パウエル中佐が捕まりません」

「――何ですって!？」

はたして故意か、偶然か。しかし理由がどうあれ、任務の責任者であるパウエル中佐がいない限りシャトルは飛ばせない。

マリーンが唇を嚙む。

「……今の命令は、中佐の所在が判明するまで延期。中佐の確保を最優先に」

冷え冷えするほど抑制された声色。管制室に気まずい空気が広がる中、マリーンは足音も高々に部屋を後にした。

責任者としてあるまじき失態を犯した中佐が、国外のゴルフ場にいることが確認され、その知らせが彼女の元にもたらされたのは半日後のことであった。

そして、如月葵が特待生として奇跡の船に迎えられて四週間目に突入しようかという頃、軍による如月博士スカウト作戦がついに開始される。

奇跡の船の平穏な日々は、終りを告げようとしていた。

第9話

——想いを消化しなければ、前には進めないよ。

大学とは別にプロテクト処理された特別回線、地上と直通で結ばれた通信施設を独自に持っている医学部。

本来は患者に関する守秘義務ゆえの特別措置なのだが、ここ最近
は教授との密談を彬に知られたくないアクアが個人的に使用して
いた。

まだ暖かいディスプレイの表面に額をつけ、アクアは瞼を伏せる
と小さな声で呟いた。

「とうとう戻ってくるのね」

もしも最初にそのことを知っていたら、はたして自分は協力を拒
んだだろうか。

答えは否であろう。

時間が何も解決してくれないことは、アクア自身が一番よくわか
っている。

「……だとしても私には酷です、教授」

その知らせは彼女とは別に、本校から執行部にも今頃もたらされ
ているはずである。しかし、アクアは動こうとはしない。奇跡の船
が混乱に陥ること、葵が窮地に立たされることを承知しているにも
関わらず。

面を伏せたまま、彬のことを想うと動くことができなかった。

コロニーの中だとはいえ緑豊かで、木洩れ日の降り注ぐ穏やかな
公園。

午前と午後の講義の合間、公園はたくさんの学生で賑わっている。
そんな群衆の中に葵の姿があった。

主治医であるアクアから退院の許可が下り、学業復帰を果たした葵。遺伝子工学部の生徒たちと昼食を一緒に済ませての、学部への帰り道である。

中央広場では、着々と集会の準備が進んでいる。抗議集会の特設ステージを設営中で、当てにしていた奇跡の船の大工方、機械工学科の協力が得られず遅れの著しかった舞台装置も、ここにきて大方完成しているようであった。

その様子を足を止めて楽しそうに見物する遺伝子工学部の生徒たちに交じって、葵は天を仰いで思う。

倒れる前と比べれば、一転して明るく穏やかな日々。

しかし、決して違和感を拭い去ることは叶わないと。

『――胃壁に穴を開けるほどの胃潰瘍を招いたストレスが何に起因するのか、それをご自身で把握されること。でなければ、胃潰瘍は間違いなく再発します』

今朝そう言って退院を告げたアクア。酷薄すぎる言葉に、葵は複雑な笑顔で答えた。

『すぐにまた医学部へ戻ってくるかもしれませんがね。今日から執行部会長にお世話にならなきゃいけないのでしょうか？』

初めて会った時から彬という人間に対し感じていた嫌悪感はすではない。あるのは諦めにも似た無力感だ。

（気が滅入るのは仕方がない。平穩無事に、早く一週間が過ぎるのを願うだけだ）

周囲の遺伝子工学部の生徒たちに悟られぬよう、葵はひっそりと溜息をつく。

しかし、そんな葵の懇願を嘲笑うかのように、奇跡の船創立以来最悪の、長い一週間が幕開けようとしていたのである。

災いなる軍の来訪によって。

その報せが執行部に入ってきたのは、軍用シャトルが奇跡の船の

宇宙港に接岸しようという頃であった。

「どういうことだ!？」

執行部室に足を踏み入れるなり、彬が険しい表情で声を発した。近く実行される軌道修正の件ですつと管理部に籠っていた彬であるが、連絡を受けてすぐに姿を現わしたところを見ると、さすがに今回の事態に対しては平静でいられないようだ。

軍が制服姿のまま、直接、この奇跡の船に乗り込んでくるなど。だが彬に問われたものの、困惑顔のアルフレッドと少佐に返すべき答えはない。

「本校からの緊急連絡は十分前。何だか向こうも状況が掴めないって、悲鳴を上げてたよ」

とりあえず、アルフレッドが現段階での情報を伝えたが、それを聞いた彬は訝しげに眉をひそめる。

「じゃ何だ? 軍の奴らが何の目的で乗り込んできたのか、それすらもわからないのか」

「今は、奇跡の船には迷惑はかけないって、誓約書を本校に出してきたことくらいしか」

十六番地接收の件が互いに懸案事項となっている現在、不用意な動きは、軍にとって命取りに繋がりがかねない。そうでなくとも一度は議会の白紙撤回を受けているのだから。

にも関わらず、軍の不可侵たる聖域である奇跡の船への来訪。

そんな危険を犯してまで軍が動いた目的とは。

「もしかして、抗議集会の件とか」

「そんな可愛い連中かよ」

アルフレッドが神妙な顔で言ったが、彬に一蹴される。

「じゃあ、新型ロケットブースターとか」

だが、今度は少佐に突っ込まれる。

「その場合、来るのは技術諜報工作員だ。軍服着たままやって来るほどお茶目な奴らじゃないな」

二人に揃って否定されて、アルフレッドは不機嫌そうにぼやく。

「……施設でも技術でも行動でもないとしたら、あと残ってるのは人的要因じゃないか」

アルフレッドはそう言いながらも、軍が友好関係を築くために正規の軍人を派遣してくるなどあり得ないと思う。

どうせこれも一笑されると、ふてくされかけたアルフレッドだったが、反応は予想を裏切ることになる。

「目的は——俺か？」

彬が神妙な顔で呟いた。

その台詞に目を剥くアルフレッド。

「はあ？ 何で軍が彬に用あるんだよ」

彬の発言をこそ笑おうとしたが、継いだ少佐の言葉に阻まれることになる。

「その可能性はないだろう。それならもつと用意周到に仕掛けてくるだろうし、本校が緊急連絡だけで済ませるはずがない」

用意周到、つまり本腰を入れて掛かるということ。かつて軍の幹部候補生だった少佐に、ここまで言わせるとはどういうことなのか。啞然とするアルフレッドを見やって、少佐が囁くように言う。

「軍の情報システムが、民間と較べて技術的に遅れているのは知ってるだろう」

少佐の言葉に、アルフレッドは迷いもせず頷く。

それは軍がNNシステムの恩恵を受けていないから。情報電子工学部門に関しては、軍はどうしても民間に並ぶことができないのだ。独自に開発した情報伝達システムをNNシステムに置き換えできない限り。

「俺が軍に在籍していた当時から電子工学の天才高季彬は、軍のスカウト対象者の内でも特別枠なんだよ」

「……俺の両親がニューロン・ネットワークシステム開発者なもので。双方の優性遺伝子を受け継ぐなら先駆者を超える情報伝達システムを開発できるんじゃないかって、安直な軍の楽観主義だから気にするほどじゃない」

面白くもなさそうに彬が言い加える。

だが、これまで謎とされてきたNNシステムの開発者が彬の両親であると聞かされて、アルフレッドが驚かないわけがない。

「凄いじゃないか！」

何百回ノーベル賞を贈っても足りない時まで大絶賛される、世紀の偉業を成し遂げた偉大な科学者。

瞳を輝かせて叫んだアルフレッドだが、二人の反応は冷たかった。

「馬鹿か、お前は」

「今はそれどころじゃないって、アル」

少佐にまで真顔でたしなめられては、もう黙り込むしかない。肩身を狭くするアルフレッドを横目で見やりながら、彬が苦々しく舌打ちする。

「まったく時間がないってのに。……軍の目的さえ把握できてないんじゃない話にならない」

執行部として対処のしようがないと、彬が少佐と視線を交わして表情を一段と厳しくした時であった。

「だったら如月博士だろ」

驚いて目を瞬いた二人に対して、アルフレッドはあっさりとした口調で告げる。

彼の脳裏から消えなかった、葵を特待生として上げた本校に対する疑念。それを踏まえれば、答えは楽に導き出せた。

「人的要因で人材を求めているなら話は簡単。今後の遺伝子研究を見据えれば、如月博士は軍にとって魅力ある人材だろうし、その博士を軍が狙っていることを知れば本校も動かざるを得ないだろ？ 何たって博士は狭間研究所、高季教授のいる場所から来たんだから」

時期はずれの特待生選抜。それも国際大学コロニー初代学長、高季教授が一枚噛んでいるとすれば納得のいく話である。

アルフレッドと少佐が息をひそめて見守る中、彬は宙を睨んで拳を握る。

蘇る記憶。

——何を隠している。

機械工学科を震源地とする地震のおかげで、アクアに問えなかった言葉。

杉は憎々しげに呟く。

「……あいつら、覚えてろよ」

拳を開閉パネルに叩きつけ部屋を出ると、杉は猛然と廊下を走り出したのである。

第10話

異変は一角から起きた。

ざわつと人の気が急速に乱れ始めるのが感じ取られる。

「何だ、どうしたんだ？」

葵の隣りに立つ遺伝子工学部の生徒が、怪訝そうな声を上げたが答えられる者はいない。

不穏な雰囲気蔓延してゆく広場で、事態が呑み込めずに困惑する生徒たち。しかし、異変の理由はすぐに判明することになる。

「――軍だ!!」

葵の前方で生徒が鋭い声を発した。

その言葉に誰もが有り得ないと思い、そして、人垣の向こうに紛れもない軍人の姿を目にして我が目を疑うことになる。

周囲の空気は一転し、張り詰めた緊張感が、瞬く間に広場全域に飛び火してゆく。

「!?! 何で奇跡の船に軍が……」

動揺する皆の声を聞きながら、葵は訝しげに眉宇を寄せた。

（軍――？）

しかし、葵は深刻には捉えなかった。なぜなら学生たちのように軍を毛嫌いしているわけでもないし、どうせ自分には関係のないことだからと。

ところが、葵の視界にも入った軍服姿の三人は迷うことなく、一直線に葵の元へ悠然と歩み寄ってくる。

広場の学生たちが息を殺して見守る中、軍人たちは葵の前で立ち止まり、高圧的な態度で葵を見下ろす。

「狭間研究所の如月葵博士ですね。統合軍本部よりお迎えに上がりました」

パウエル中佐の第一声である。

（軍の……迎え！？）

思いがけない言葉を突然聞かされた葵は、声を発することもできなかった。

そんな葵を見てパウエル中佐はほくそ笑むと、背後の部下に指を鳴らして合図を送る。手筈通りに部下たちは葵の両脇へと回り込み、腕を捉えようと手を伸ばした。

まさにその瞬間だった。

「え……！」

葵の襟首を引っ掴んで後方へ引き倒し、中佐と葵の間に背の高い人影が割り込んだのは。

「それは不作法ってやつじゃないのか」

軍服に憶することなく、不敵な微笑さえ浮かべ言つてのけたのは、もちろん執行部室から駆けつけた彬である。

「何だ、君は。この行為は公務執行妨害になると知っているのかね」
不機嫌そうに顔を歪めたパウエル中佐の言葉に、半ば呆れたように彬が答える。

「執行部会長だよ。忠告しとくけど、問題になるのはそつちの方だ。国際大学コロニーが国際法によつて超法規的に保護された、治外法権区域だつて知らないのか」

ところが彬の言葉を耳にしても、中佐は何ら態度を改めようとはしなかった。

「我々は軍の特務を受けて行動している。国際大学には通知済みだ。即刻、如月博士を引き渡してもらおう」

聞く耳を持たないとはこのことだ。

十六番地の件を抱えた軍にしては、随分とお粗末な人間を寄越したものだ、彬が失笑しながら答える。

「残念ながらご期待には添えそうにないな。法をおさらいしてから、改めて出直してもらおうか」

まさに売り言葉に買い言葉。

憤怒に顔を赤らめる中佐の表情を見て、引き倒された葵を受け止

めたアルフレッドと少佐が、彬の後方で無茶苦茶だと頭を抱える。
火花飛び散らんばかりの両者。いつ急転してもおかしくない状況
に身を竦める学生たち。

しかし彼らの予想に反して緊迫した空気を破ったのは、中佐でも
彬でもなく、涼しげな女性の声だった。

「国際法第七条、第三項。国際大学コロニー内においては、設備に
関する事項以外の全ての権限を学生より選出された執行部たる自治
組織に委ねる。警察、統合軍などの公的査察に関する許可について
も、上記に準ずるものとする。——確かにこちらの不法法、謝罪は
します」

彬の言った台詞を正確に言い改めた士官服に身を包んだ女性は、
颯爽とした足取りでこちらに歩み寄る。

任務上の役割はもちろん、階級も下になるが、地上で軍法会議も
のの不手際をしでかした中佐としては、不服ながらも黙って彼女に
場を譲るしかない。

そうして中佐に代わって彬の前に立った彼女は、揺るぎない輝き
を宿した紺碧の瞳を彬に向けた。

「ですが、本校に許可済みである法規に則った軍の特別任務に、可
能な限り協力するのも執行部の職務。ならば、如月博士との交渉を
妨げないでいただきましょうか」

彼女の言葉に彬の返答はない。

普段何が起ころうとも自分のペースを崩すことなく、ふてぶてし
さでは右に並ぶ者はいないと、本校でも名の知れた17歳の執行部
会長。

しかし、今の彼には乾いた声で、

「……マリーン」

6年ぶりに再会した彼女の名を呟くだけで精一杯だった。

暖かな春の光のような存在だった両親が、宇宙施設間を結ぶ連絡

シャトルの事故で亡くなったのは、彬が地球の狭間研究所にいた5歳のときだった。

彬は事故後、親権を得た祖父の高季教授に伴われて、国際大学コロニーとなる予定の、建設中の宇宙施設に身を移すことになる。

それから2年の時を経て、彬のいる宇宙施設は正式に国際大学コロニー、宇宙の学び舎として開校し、試験も兼ねて段階的に地上の国際大学から現役の大学生や院生、特待生を受け入れ始めた。

大半は宇宙医療センターで実務経験を有する医学生で、平均年齢は24歳という数少ない一期生。その中でも特に優秀と一目置かれていたのが、13歳にして国際大学で俊才と名を馳せていた医学部特待生マリーン・F・ウィンクラー。

彬が2年もの間、一人で眺めていた地球と同じ色彩を瞳に宿した、可憐で愛らしい黒髪の少女だった。

まず執行部室から出てきたのは、パウエル中佐と直属の部下たちである。

立ち去る方向から推測すると、おそらく教職員区域の学長室に向かうのだろう。

背を向けているため表情はわからないが、ささくれ立った雰囲気から察するに、執行部室で行われた葵と軍の直接交渉の結果は、中佐にとって不服であったとみえる。

続いて姿を現したのはマリーンだ。彼女は中佐たちの遠ざかる背中を見やり、何やら考え込む素振りを見せたが、すぐに踵を返すと中佐たちとは逆方向に歩き出した。

そして、マリーンは壁に背を預けた長身の姿を認める。

——高季彬。

マリーンは少しだけ表情を曇らせたものの、軽快な足取りのまま彬の傍まで歩み寄ると、足を止めた。

「如月博士は答えを保留しました。期限は七日後、それまで軍は博

士の返答を待ちます」

マリーンは彬の方を見ようとせせずに言った。

私的な感情を除けば、相手が執行部会長職である以上、伝えるべき事柄は伝えなければならぬから。

軍の誘いを受けるか否か。答えを得られるまで七日間、軍は奇跡の船にとどまると。

そんなマリーンの言葉を聞いた彬は、わずかに表情を歪めると、マリーンに向けていた視線を逸らせて口を開く。

「人を人だと思わず、強引極まりない手口が常套手段の軍が博士の返事待ちとはね。一体、何を企んでるんだ」

公園広場で彬が割って入らなければ、葵はパウエル中佐に拉致同然で連れ去られていたと思われる。その強引な方針を覆した上で、任務の成功如何すらも葵の自由意思に任せたのは、軍が国際法に配慮したせいではない。おそらくは、マリーン個人の采配によるもの——上官である中佐に逆らってまでの。

非公開で行われた軍の交渉だが、その程度のことは彬でもわかる。だから尋ねた。

何の意図があつて奇跡の船に戻ってきたのか。6年の時を経て、ふたたび自分の前に現れた理由を。

おそらく彼女も問われることを予測していたのだろう。マリーンは眉一筋動かすことなく、淡々とした声色で即答する。

「任務を遂行するため国際大学コロニーにいる。特別な意味など存在しないわ。それと断っておくけど、私が今回の任務を受けたのは軍の特務命令だったから」

——そうでなければ、奇跡の船になど来るはずがない。

それこそが、紛れもない彼女自身の本心であった。

そんな時、マリーンの脳裏に蘇る声。

裏切り者——

6年前、別れ際に彬が言った最後の言葉。

もう一度耳にすることになるのだろうかと思ひながら彬の方に目

をやったが、マリーンの予想に反して彬の表情は穏やかなものだった。

ただ、視線を交わそうとはしなかったが。

彬は静かに身を起こすと、マリーンに背を向けて歩き出す。

マリーンは、彬の足音が聞こえなくなるまで動こうとはしなかった。

涼しげな白皙の横顔から胸中を窺い知ることにはできないが、じつと宙を見つめる瞳には翳りがよぎる。

それは罪悪感か、それとも喪失感か。どちらにしてもマリーンと彬との間に、立場の違いが歴然と存在することは確かなのだ。マリーンが自ら望み、軍に身を置く以上は。

やがて大きな吐息を漏らしたマリーンは、その場を立ち去るべく足を踏み出そうとしたが、ふいに表情を厳しくすると両腕を組んで鋭い声を発する。

「……遅いお出座しね。奇跡の船の女主人ともあろう御方が」

「久しぶりだなんて、挨拶する間柄ではないわね」

どちらの声にも含まれる、明確なる敵意。

マリーンの声に応えて進行方向の曲がり角から、剣呑な雰囲気自身に纏い姿を現わしたのはアクアであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n61111r/>

静止衛星軌道十六番地の奇跡

2011年10月10日03時26分発行